

Japanese Religious Mediums and Folk Belief among Japanese Americans in Hawaii : Female Mediums on Oahu Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中牧, 弘允 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004522

ハワイにおける日系霊能者と民間信仰

——オアフ島の女性霊能者の事例——

中 牧 弘 允*

Japanese Religious Mediums and Folk Belief among Japanese
Americans in Hawaii: Female Mediums on Oahu Island

Hirochika NAKAMAKI

The religious behavior of immigrants not only reflects their religious needs in a new society but also illuminates the heritage of the society left behind. Research on the religious behavior of Japanese immigrants and their descendants mainly concerns these themes. This paper is based on field research that I conducted during June–August, 1977 and June–August, 1979, as a member of the research team for the project entitled “Japanese Religions among the Japanese Americans in Hawaii”.

Data are presented on religious experiences and the activities of nine female mediums who have appeared sporadically since the second decade of this century, and who have been little studied. Here, “medium” is defined as a person who is believed to possess the mystical powers to communicate with spiritual beings through his/her five (or even six) senses, and who is able to use these powers on behalf of others. This is a fairly broad concept, but differs distinctively from that of “preacher” and “priest”, who, respectively, communicate with spiritual beings mainly through written scriptures and formalized rituals.

A brief religious history of Japanese Americans is provided as a historical context for the mediums. Three stages are discerned here in the social history of Japanese Americans in Hawaii, 1) plantation life 2) plantation to city life 3) urban and suburban life. In the plantation camps male religious leaders who organized *Daishi-kō* were prominent figures in healing rituals and exorcism. Most later became *Shingon* priests. The first female medium

* 国立民族学博物館第1研究部

appeared in Honolulu, and city people have been their main clients. Their religious activities are somewhat similar to those of adherents of new religions such as *Tenrikyō* and *Sekai-kyūsei-kyō* (Church of World Messianity). Mediums are, however, quite different from the latter in terms of originality and flexibility in their activities.

Multiple membership is also discussed briefly, since it supports the activities of mediums. Roughly speaking, established churches headed by *Jōdo-shinshū* have fulfilled the needs of rites of passage and (religious) education for the Japanese (Americans), whereas mediums have satisfied the so-called beneficial needs of this world, strongly based on the folk beliefs of Japanese immigrants. The role of *Shingon* priests is somewhat intermediate.

Then nine cases of female mediums are presented extensively with minimum speculation. The order of presentation is:

1. Rev. Shina Miyake and *Ishizuchi Jinja*
2. Rev. Myōsei Matsumoto and *Palolo Kwannonji*
3. Abbess Tatsushō Hirai and *Tōdaiji Bekkaku Honzan*
4. Rev. Kashō Sawada and *Tenshindō*
5. Rev. Junchō Matsuoka and *Kapalama Fudō Kyōkai*
6. Rev. Jikyū Rose and *Kōganji*
7. Rev. Sēdō Hayashi and *Shigisan Gobunreisho*
8. Mrs. Kame Shimabuku
9. Rev. Kōshō Sakai

Finally, some distinctive features of mediums are mentioned briefly. First, there are two types of mediums, calling-type and training-type. For most, (ascetic) training at the headquarters is important since it helps their clients to acknowledge and justify the mystical powers of the medium, i.e., their sense of affiliation with the headquarters in Japan is quite strong, because it bestows legitimacy regardless of what they do in Hawaii.

Second, divinities with whom they communicate range from Buddhistic (e.g. *Fudōmyōō*, *Kwannon*, *Jizō*, and *Bishamonten*) to Shintoistic (e.g. *Futenmagū* and *Itsukushima Jinja*) ones. Some mediums communicate mostly with a specific divinity, whereas others communicate with various divinities. All, however, stress the blessings of specific divinities and never negate the existence of other spiritual beings.

Third, among the many devices used to transmit their mystical powers the commonest is the conveyance of divine messages which they claim to have received, followed by the so-called *kaji* method, especially using hand techniques. Other devices include spirit-ualistic medium, exorcism, clairvoyance and substitution. The

objects used by mediums and/or clients, and believed to possess mystical powers, include holy water, holy scriptures, amulets, rosary, salt and sand.

Last, a comparison is made of the organizational dimension. Some mediums confine their work to a private, person-to-person relationship, whereas in other cases lay organizations have been formed around the mediums, despite their reluctance for public propagation. Though these organizations vary from cult- to church-type, they all retain some intimacy among their membership in addition to close personal relationships with the mediums. In either type, however, succession has been a serious problem because of the intrinsic nature of mystically gifted powers that the mediums claim to possess.

はじめに	7. 林生道と信貴山御分霊所
I. オアフ島の日系宗教と霊能者	8. 島福カメ
1. 現況	9. 酒井幸照
2. 歴史	III. 比較と考察
II. 事例研究	1. 霊能者の誕生過程
1. 三宅シナと石鎚神社	2. 交流対象
2. 松本妙清とパロロ観音寺	3. 霊能力の活用
3. 平井辰昇と東大寺布哇別格本山	4. 組織
4. 沢田花祥と天真道	5. その他
5. 松岡順澄とカパラマ不動教会	おわりに
6. 慈久ローズと高岩寺	

はじめに

日本人にとって、宗教と総称されるものがいかなる意味をもち、今後いかなる意味をもち続けていくかを知るためには、日本列島を舞台に展開してきた過去の歴史のなかで、外来・土着の宗教が果してきた機能に注目し、それを遠く古代にまで遡って探る必要があると同時に、現代の社会状況のなかに宗教の存続する要因を求め、それを究明する必要があることは言うまでもない。従来の研究は、こうした視角から「日本人と宗教」のテーマに取り組んできたといっても過言ではあるまい。しかしながら、日本人は日本列島でのみ生活してきたわけではなく、今後もここでのみ生活できるという保証はどこにもない。日本列島の日本人よりも、かえって異文化・異宗教の中に身を投じた日本人や、その中で育った日系人のなかに、日本の宗教のもつ基本的な意

味や未来の予兆をはっきりと読みとることはできないであろうか。明治以降、近世的宗教風土に育まれてきた日本人が、全く新しい社会を建設したり、あるいは先進的な異文化のなかで生活した際に、宗教というものがどのような意味をもっていたかを探ることによって、少なくとも近代以降の問題として「日本人と宗教」というテーマにいささかの寄与はできないであろうか。さらに、ユーラシア大陸の東端に位置する日本は、長い間外来の宗教を受容する立場におかれてきたが、いまや日本産の宗教は、日系人はおろか非日系人の間でむしろ熱心に受容されているという現象も生じている。つまり日本人はいまや日本の宗教を“輸出”する主体になっている。

筆者は、このような問題関心から、明治以降新たに形成された北海道の移民社会と、明治初年より移民を送り込んだハワイの日系人社会とを主たる調査対象とし、「日本人と宗教」のテーマにかかわる分野を研究してきた【中牧 1975 ほか】。以下の報告はその一環であり、ハワイにおける1977年と1979年の調査にもとづき¹⁾、日系(本)人の女性霊能者が、日本的な民間信仰の存続にいかなる役割を果たしてきたかを検討するものである。対象地域は、ホノルルをかかえるオアフ島に限定し、ホノルルおよびその近郊における女性霊能者の活動に重点をおいている。調査の現段階では、できるだけ多くの霊能者との接触を意図したため、特定の個人や集团的を絞ったインテンシブな資料よりも、エクステンシブな資料が中心となっている。

ところで、ハワイの日系宗教に関するこれまでの研究で、特記に価するものといえば、教団発行の刊行物を除くと、本派本願寺を中心に日系仏教史を跡づけた Hunter の労作【HUNTER 1971】と、戦後の日系人に強烈なインパクトを与えた天照皇大神宮教に関する Lebra の論文【LEBRA 1970】程度であった。いわんや、キリスト教や浄土真宗の強いハワイではとかく「迷信」扱いされがちな霊能者の宗教活動については、非難・攻撃されることはあっても、学問的な関心から俎上にのせられたことは皆無に等しい状態であった。こうした状況をふまえるならば、日系宗教の全体像を把握するためには、まずもって霊能者の活動や民間信仰の実体に広く当たってみる必要がある。筆者はこのような意図のもとに1979年の調査を進めた。しかし、この調査といえども、ハワイの日系霊能者に関する端緒的研究の域を出るものではないので、本稿は一般的な結論を提出するというよりも、事例報告としての性格を強く留めている。なお地蔵信仰についてはすでに簡単な報告を行った【中牧 1980: 98-105】。

さて本論に入る前に、霊能者と民間信仰の意味内容について一言ふれておきたい。

1) 文部省科学研究費海外学術調査(研究課題「ハワイ日系人に関する宗教調査」, 研究代表者: 柳川啓一)の補助金により、1977年6月~8月、および1979年6月~8月に現地調査を実施した。

まず「霊能者」という用語は、真如苑の如く教団用語として定着しているところもあり、それと区別する意味で「霊能力者」という用語を使用する研究者もいる【白水 1979: 71】。筆者の意味する霊能者とは、霊的存在と直接交流しうる能力を備えた（と信じられている）人物で、その能力を他者の現実的問題に活用しうる者をさす。もう少し詳しく言うと、霊能者とは、観念的に想定された霊的存在と、‘第六感’をも含めて感性的に交流しうる能力をもち、その能力を具体的な問題に適用して宗教的活動を行う人物のことをいう。したがって、霊媒はもとよりシャマン、巫女、修験者、あるいは教祖や教団の霊能者などを包摂する広い概念である。もちろん霊能者といえども‘天賦’の霊能力にのみ依存するわけではなく、修行等を通して自己のうちに諸々の技能を自覚的・無自覚的に身につけていく。憑依や託宣なども、大部分はこの後天的な技能によって支えられていることは、言うまでもない。また霊能者が必ずしも感性的な霊能力のみを使用するとは限らず、超感性的=概念的な知識体系（神学、薬学、医学、ないしそれに相当するもの）を援用して問題解決をはかる場合も多々みられるところである。とはいえ、霊能者が、宗教的な知識や論理の適用を身上とする布教師・説教師や、一定の順序に従って執行する儀礼を身上とする僧侶・神官とは、かなり異なったカテゴリーに属することは明らかであろう。

民間信仰に関しては、堀一郎によって次のように規定されている。

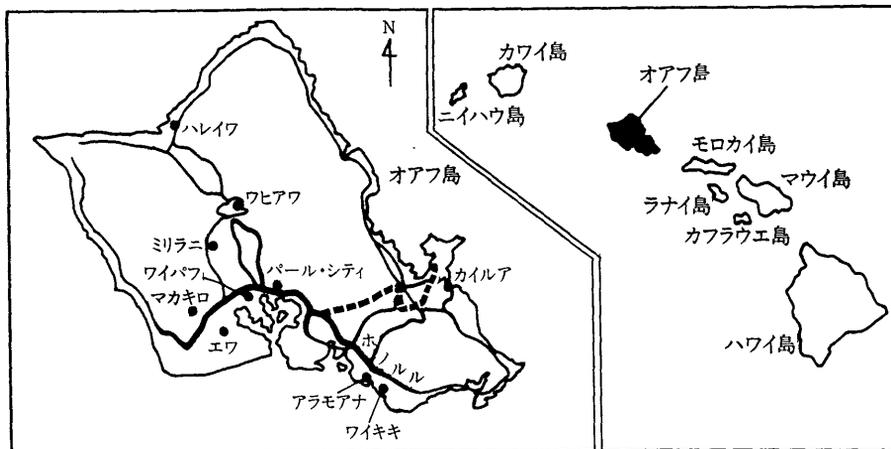
「民間信仰の中心的な特色は、自然宗教と直接的に、或は残留的、習合的に連続した性格を持つ点にある」【堀 1951: 12】

この場合の自然宗教とは、宗教成立の基本要素である教祖・教理・教会を著しく欠くものと考えられている【堀 1951: 2】。しかしながら民間信仰は、自然宗教ないし原始的宗教と連続した面が強いとはいえ、新たに創造されたり消滅したりする面も有している。民間信仰は、きわめてルーズな規範に支えられた宗教慣行であるだけに、社会変化の波をまともなうけて発生しやすく、また消滅しやすいという特徴をもっている【中牧 1979b: 255】。したがって、基本的には原始的な信仰内容に終始するとはいえ、民間信仰といえども、連続と断絶の両面から眺める必要があることを、さしあたり指摘しておきたい。

Ⅰ. オアフ島の日系宗教と霊能者

1. 現 況

ハワイ州の日系人は約21万人にのぼるといわれ、これは総人口の約28%を占め、白



ハ ワ イ 全 島 図

人に次ぐ第2の民族集団を形成している²⁾。この日系人を主たるメンバー母胎としている日系宗教は、宗派単位で約30を数える。宗派や組織（寺院・教会単位）の数え方によって多少の差はあるが、オアフ島に限定しても、組織数88に達する（表1）³⁾。それによると、日本の主要宗派のほとんどは、ハワイに拠点をもっているのである。文化庁宗務課の分類に準ずると、その内訳は、仏教系16、神道系8、諸教6、その他（ハワイ産）1となる。実際にはこの他に、拠点をもたない霊友会や、存在を確認していない宗派などが若干数ある。

宗教組織の内訳は、天理教25、本派本願寺12、真言宗6、曹洞宗5、東本願寺4、天台宗3、金光教3、浄土宗2、日蓮宗2、その他26となっている。しかしその内容に立ち入ってみると、教会数で首位を占める天理教のなかで、法人格をもった教会は4～5にすぎず、「よふぼく」（用木、信徒のことをさす）数も1977年7月現在で712人とさして多くはない。残りの教会は天理教伝道庁に所属する【小林 1979: 54】。これに対し日蓮正宗は組織2となっているが、オアフ島の会員数は6,800世帯を公称している。そのうち日系人は6割で、非日系人が4割を占めている。もっとも活動会員はこの数字をかなり下まわるものと思われる【中野 1979】。こうしてみると、潜在的信徒を含めて最大の教勢を誇るのは、やはり本派本願寺であろう。次いで曹洞宗、東本願寺、浄土宗などが日系人の間に安定したメンバーを有している。これにキリスト教（カトリック、プロテスタント諸派）、モルモン教、エホバの証人、セブン

2) U. S. Bureau of Census によると、1970年のハワイ総人口76,9913人のうち、白人は29,8160人(39%)で日系人は21,7307人(28%)となっている【ATLAS OF HAWAII 1973: 105】。

3) 1977年の調査結果に【柳川・森岡 1979: 179-193】、1979年の調査資料を加えて作成した。

表1 オアフ島の宗教組織

(1979年8月現在)

	宗 派 名	組 織 数		備 考
		ホノルル	郡 部	
1	浄 土 宗	1	1	
2	本 派 本 願 寺	3	9	浄土真宗本願寺派 郡部のうち2は兼務
3	浄土真宗本願寺派	2		真宗教会, 念仏堂(単立)
4	東 本 願 寺	3	1	真宗大谷派
5	日 蓮 宗	1	1	
6	曹 洞 宗	1	4	
7	真 言 宗	5	1	
8	真 言 宗	1		極楽寺(単立)
9	信 貴 山 真 言 宗		1	御分霊所
10	天 台 宗	3		別院, パロロ観音寺, 高岩寺
11	顕 本 法 華 宗	1		妙法寺
12	真 仏 教	1		菩提寺
13	華 嚴 宗	1		東大寺別格本山
14	日 蓮 正 宗	1	1	ホノルルに会館, カネオへに寺院がある
15	本 門 仏 立 宗	1		
16	金 峯 山 修 験 本 宗	1		カパラマ不動教会
17	神 社 本 庁 教	1		ハワイ大神宮
18	出 雲 大 社 教	1		出雲大社
19	神 道	3		金刀比羅神社, 石鎚神社, ハワイ稻荷神社
20	天 理 教	21	4	
21	金 光 教	1	2	
22	生 長 の 家	1		
23	天 真 道	1		
24	天 照 皇 大 神 宮 教	1		
25	世 界 救 世 教 会	1		
26	立 正 佼 成 会		1	
27	パーフェクト・ リパティ	1		
28	真 如 苑	1		
29	辯 天 宗	1		
30	真 光 文 明 教 団	1		
31	天 神 教		1	
	合 計	61	27	

スデー・アドベンチスト, クリスマン・サイエンスなどを加えれば, 日系人の宗教
 帰属の全容がほぼ明らかになるであろう。

プロテスタントの優勢なアメリカでは, 個人帰属を原則とし, メンバースhip制を

採用している。ハワイの日系宗教も基本的にはメンバーシップ制であり、本派本願寺などの寺院においても、世帯主のみがメンバーとなっていることが多い。このため同一世帯内であっても、一世は仏教、二世はキリスト教、三世は創価学会というように、世帯構成員の宗教帰属が均一にならない場合が少なくない。1977年に実施したクエスチョネア調査の結果によると、父親の宗教が本人と同じ場合は約4分の1にすぎず、異なる場合が半数を越えている(表2) [柳川・森岡 1979: 81]。母親の宗教に関しても、父親に比べれば、同一の場合がやや多いとはいえるものの、大体同様のことがいえる。さすがに配偶者の宗教となると、半数近くが同一の宗教であるが、2割程度は異なる宗教をもっている(表3) [柳川・森岡 1979: 82]。子供の宗教の場合は、回答者と同一の場合が異なる場合をやや上まわっている(表4) [柳川・森岡 1979: 82]。この統計はサンプルの偏向や無回答も多く、全体の動向を忠実に反映しているとは言い難い面もあるが、家庭内の宗教がいかに関個人により異なっているかを如実に示している。この点、日本国内の宗教帰属とは著しい対照を示しているといえよう。

さらに、個人の単位でも日系人の宗教帰属は、欧米人の単数帰属ともいべき基本的原理とは異なって、複数帰属を前提としている。クエスチョネアで現在所属している宗教団体を単数形で問うたところ、はからずも表5のような結果が得られた [柳川・森岡 1979: 85]。それによると4.4%の人が複数の宗教団体に所属しており、とりわけ立正佼成会において顕著であった。複数形で設問したら、もっと増えていたかも

表2 父親の宗教

	本派	東	浄土	真言	東大	金刀	天理	創価	佼成	天照	マキ	ハリ	カリ	合	計
本人と同じ宗教	19 70.4	3 27.3	4 36.4	2 66.7	5 11.4	2 33.3	15 55.6	19 22.6	1 2.1	42 34.4	2 5.0	9 24.3		123	25.7
異なる宗教 (神道)	1 3.7	2 18.2	1 9.1		1 2.3			2 2.4	1 2.1	3 2.5	2 5.0		1 5.3	14	2.9
異なる宗教 (仏教)		1 9.1	2 18.2	1 33.3	36 81.8	4 66.7	8 29.6	47 56.0	41 85.4	47 38.5	18 45.0	16 43.2	11 57.9	232	48.4
異なる宗教 (キリスト教)								5 6.0	1 2.1	3 2.5	2 5.0	1 2.7		12	2.5
異なる宗教 (新宗教)								1 1.2						1	0.2
無宗教							1 3.7	2 2.4		3 2.5			3 15.8	9	1.9
同じか、異なる か不明	5 18.5	3 27.3	3 27.3								12 30.0	4 10.8	3 15.8	30	6.3
複数宗教										2 1.6				2	0.4
無回答	2 7.4	2 18.2	1 9.1		2 4.5		3 11.1	8 9.5	4 8.3	22 18.0	4 10.0	7 18.9	1 5.3	56	11.7
合計	27	11	11	3	44	6	27	84	48	122	40	37	19	479	

* 約1/4が父親と同じ宗教に属している。

* 本人がクリスチャンの場合も父親は仏教徒であった人が約半数である。

表3 配偶者の宗教

	本派	東	浄土	真言	東大	金刀	天理	創価	佼成	天照	マキ	ハリ	カリ	合	計
回答者と同じ宗教	11 42.3	3 27.3	4 50.0	2 66.7	17 38.6	3 50.0	17 81.0	43 76.8	12 26.1	51 53.1	5 15.2	9 27.3	1 7.7	178	45.1
異なる宗教 (神道)															
異なる宗教 (仏教)		1 9.1			17 40.9	1 16.7	1 4.8	2 3.6	23 50.0	4 4.2	2 6.1	1 3.0	2 15.4	54	13.7
異なる宗教 (キリスト教)	1 3.8						1 4.8	1 1.8	6 13.0	4 4.2			3 23.1	16	4.1
異なる宗教 (新宗教)						1 16.7				1 1.0				2	0.5
無宗教		1 9.1		1 33.3	1 2.3			3 5.4		3 3.1	1 3.0	1 3.0	1 7.7	12	3.0
同じか、異なるか不明	5 19.2	3 27.3	1 12.5								14 42.4	7 21.2	3 23.1	33	8.4
複数宗教									1 1.0					1	0.3
無回答	9 34.0	3 27.3	3 37.5		8 18.2	1 16.7	2 9.5	7 12.5	5 10.9	32 33.7	11 33.3	15 45.5	3 23.1	99	25.1
合計	26	11	8	3	43	6	21	56	46	96	33	33	13	395	
非該当	(1)		(3)		(1)		(6)	(28)	(2)	(26)	(7)	(4)	(6)	(84)	

* 半数近くが配偶者と同じ宗教である。ただし、キリスト教会はその率が極めて低い。

表4 子供の宗教

	本派	東	浄土	真言	東大	金刀	天理	創価	佼成	天照	マキ	ハリ	カリ	合	計
回答者と同じ (○)					2 5.0	1 25.0	3 13.6	7 15.6		5 6.9	2 7.4	1 3.6		21	6.3
異なる (×)	2 9.5		1 14.3	1 33.3	2 5.0			2 4.4	5 11.9	2 2.8	2 7.4	2 7.1	1 8.3	20	6.0
○ ○	2 9.5		2 28.6		4 10.0		3 13.6	10 22.2	2 4.8	12 16.7	1 3.7	3 10.7		39	11.7
○ ×								4 8.9		1 1.4				5	1.5
× ×	2 9.5				3 7.5	1 25.0			10 23.8	4 5.6	4 14.8	3 10.7	2 16.7	29	8.7
○ ○ ○	5 23.8		1 14.3	1 33.3	10 25.0	1 25.0	10 45.5	12 26.7	3 7.1	19 26.4	2 7.4	2 7.1	1 8.3	67	20.2
○ ○ ×	1 4.8				2 5.0			3 6.7	2 4.8	2 2.8		4 14.3	1 8.3	15	4.5
○ × ×	1 4.8	1 11.1		1 33.3			2 9.1	1 2.2	1 2.4	3 4.2				10	3.0
× × ×	4 19.0	4 44.4			11 27.5		1 4.5	2 4.4	10 23.8	5 6.9	7 25.9	5 17.9	5 41.7	54	16.3
無回答	4 19.0	4 44.4	3 42.9		6 15.0	1 25.0	3 13.6	4 8.9	9 21.4	19 26.4	9 33.3	8 28.6	2 16.7	72	21.7
合計	21	9	7	3	40	4	22	45	42	72	27	28	12	332	
非該当	(6)	(2)	(4)		(4)	(2)	(5)	(39)	(6)	(50)	(13)	(9)	(7)	(147)	
○ のみ	7 33.3		3 42.9	1 33.3	16 40.0	2 50.0	16 72.7	29 64.4	5 11.9	36 50.0	5 18.5	6 21.4	1 8.3	127	37.0
× のみ	8 38.1	4 44.4	1 14.3	1 33.3	16 40.0	1 25.0	1 4.5	4 8.9	25 59.5	15 15.3	4 14.8	13 35.7	10 66.7	103	31.0

* 子供の宗教が回答者と同じ人の割合は異なる人の割合をやや上回る。

* 天理教、創価学会は子供も同じ宗教である者の率がかかなり高い。立正佼成会、キリスト教会はその逆である。

表5 所属教団の数

	本派	東	浄土	真言	東大	金刀	天理	創価	佼成	天照	マキ	ハリ	カリ	合計	
1	27	10	11	3	43	4	26	83	35	122	40	37	17	458	95.6
複		1			1	2	1	1	13				2	21	4.4
数		9.1			2.3	33.3	3.7	1.2	27.1				10.5		
合計	27	11	11	3	44	6	27	84	48	122	40	37	19	479	

* 立正佼成会が、複数教団に所属していることを明記した回答者がきわ立って多い。

しれない。もちろん天照皇大神宮教のように、教団が複数帰属を認めず、信者もそれに忠実に従っているところもある。しかし、調査の過程で明らかになったことは、通過儀礼的機能（結婚式・葬式・年忌など）の強い仏教寺院と、現世利益的・民間信仰的色彩の濃い組織への二重帰属が、かなり一般的な現象として認められることである。これに加えて、初詣に出かける神社や、地域社会での付き合い上の絆をもつ寺院・教会を含めると、三重・四重に異なる宗派との関係を有することも稀ではない。複数帰属の慣習は、キリスト教側からの批判や、本派本願寺の最近の改革運動にもかかわらず、農村部はもとより都市部においても、依然として根強く存在している。

本稿でとりあげる霊能者の場合も、この複数帰属の慣習に支えられている面がとりわけ顕著である。なぜならば、霊能者の活動は、もっぱら現世利益的・民間信仰的ニーズに応える形をとっており、また信者の側からも、もっぱら通過儀礼的ニーズに応える寺院・教会との複数帰属がごく自然の形態として受容されているからである。

オアフ島の霊能者として本稿がとりあげる女性は9名、うち故人が2名含まれている。これらの女性霊能者は、1913年から断続的に誕生し、相互にほとんど干渉のまま現在に至っている。故人の建立した神社（石鎚神社）と寺院（パロロ観音寺）は、それぞれ弟子（男）と息子によって継承されている。現在活動する7名の女性霊能者のうち信徒組織を有する者5名（東大寺、天真道、カハラマ不動教会、高岩寺、信貴山御分霊所）、個別的宗教活動に限定する者2名である。なお、女性霊能者のみをとる理由は、主として男性霊能者が稀有なことによる。また真如苑や世界救世教などの教団の女性霊能者に言及しないのは、教団の教義や方法が画一的に適用されるという面が強いからである。したがって本稿で扱う霊能者は、たとえ教団の傘下に入っているとしても、独自性・独立性の強い霊能活動を行っている者である。

2. 歴 史

筆者はさきにハワイにおける日系宗教史の概説を試みたことがある [中牧 1979: 5-13]。そこでは社会変動を基調に宗教史の流れを把握する方法をとり、明治維新の

直前に渡航した「元年者」から現在に至るまでを、次の7期に分けて考察した。

- (1) 元年者時代
- (2) 耕地時代——開教前史
- (3) 耕地時代——開教期
- (4) 離村向都時代
- (5) 太平洋戦争時代
- (6) 都市時代
- (7) 現代

しかし日系人の社会史を大局的に捉えるならば、砂糖キビ耕地の肉体労働に従事した耕地時代、耕地からホノルルなどの都会に流入しはじめた離村向都時代、人口の都市集中化から都市スプロール化に至る都市時代の三大時代区分で十分であろう。本稿では、これに太平洋戦争時代を加えて、それぞれの時代の特徴をおさえながら、霊能者出現の跡を追ってみよう。

1) 耕地時代

元年者とよばれた150余名の渡航者のうち、2年後には、耕地労働に耐えかねた者など40名が帰国し、1885年まで日本人移民の渡航はなかった。宗教的にはほとんど空白の時代であり、霊能者の存在も知られていない。

1885年官約移民の第1陣が到着し、砂糖耕地の労働に3年契約で従事しはじめた。官約移民が廃止される1894年までに渡航した約3万人の日本人は、出身地別にみると西日本、とりわけ広島県、山口県の出稼移民が多かった。

1887年、カリフォルニアのメソジスト教会員であった青年信者美山貫一^{みやま}が、宣教師としてハワイに渡航し、3年間にわたり、布教と合体した禁酒・風俗矯正運動を展開した。彼の開始したピューリタニズムの伝統は、同志社の卒業生、とりわけ、1894年に渡航し、後年マキキ聖城教会を樹立した奥村多喜衛に継承されていった。

仏教の側からも本派本願寺の僧侶曜日蒼龍^{かがひ}が1889年に渡航し、オアフ島・ハワイ島・マウイ島・カワイ島の日本人を慰問してまわった。しかしこれは本山による正式開教ではなかった。曜日の外にもハワイに渡航した僧侶はいたようだが、霊能者はまだこの段階でも出現していないようである。

官約移民の時代(1885-1894)のあと、民間の移民会社による私約移民(1894-1900)、自由移民(1901-1908)の時代が続き、1908年に締結された日米紳士協定により、呼寄せを除く新移民の渡航が禁止されるに至った⁴⁾。1885年から1908年までの間、のべ

4) 官約移民、私約移民、自由移民、呼寄せ移民などの用語は『ハワイ日本人移民史』〔ハワイ日本人移民史刊行委員会 1964〕による。以下の移民数の統計も同書によっている。

10万人の日系人移住者がハワイの土を踏んだ。1900年には沖縄からの最初の移民も到着した。そして1906年から導入され始めたフィリピン人の耕地労働者が、日本人をぬいて第1位になる1922年頃まで、日本人は耕地労働者人口の多数派を占めていた。もっとも1909年と1920年のオアフ島砂糖耕地ストライキ等を機に、ホノルルへの転出者も増大した。

この時期は日系宗教史上の一大興隆期とみることができる。本派本願寺は1897年に正式に開教をスタートさせ、移民の多数派である真宗門徒を対象に、各耕地に布教場と日本人学校を次々に建立していった。1897年の正式開教から1916年までの20年間に、ハワイ全島で実に33カ所もの寺院（布教場）を建立したのである⁵⁾。本派本願寺の開教に先立ち、浄土宗は1894年に特派布教師を派遣し、1896年にはハワイ島に最初の寺院を建立した。また東本願寺・日蓮宗・曹洞宗の開教も1900年前後に始まり、顕教的性格の強い仏教諸派はほぼ出そろった。

これに対し密教的性格の濃い真言宗は、宗門による正式な開教こそ遅れたが、信徒組織としての大師講は1900年初頭から耕地に定着し始めた。1902年山口県出身の湯尻法眼はマウイ島ラハイナに仮布教場を設け、近隣地区の布教にも当たった。これが大師講の嚆矢とされている。これに次いで、大師信仰の篤信者を中心にカワイ島、ハワイ島、およびホノルルに大師堂が建立されていった。そして1914年、当時醍醐派の幹部であった関栄覚が、一部反目のみられた大師講の統一をはかるために、ハワイの開教監督に任ぜられ着任した。それまでの間に、大師堂(寺院)の数は全島で16にのぼっていた【^{ハワイ}布哇真言宗別院 1927: 60-61】⁶⁾。これら大師堂の多くは、真言宗醍醐派分教会として允許を受けていた。大師講のリーダーは僧侶出身というよりも、在家から僧侶に転じた者が初期には多かった⁷⁾。彼らを霊能者とみなすかどうかは、裏付けとなる証拠がないので速断をひかえたい。とはいえ、霊能者と似たような宗教活動を行っていたことは事実である。ある者は子供の虫封じに優れ【^{ハワイ}布哇真言宗別院 1927: 124】、ある者は火渡り、おぬくめ、法水加持などを行っていた【^{ハワイ}布哇真言宗別院 1927: 73-74】。

神社もこの頃各地に建立されていった。1898年にはハワイ島ヒロにヒロ大神宮、カワイ島ラワイにラワイ大神宮が建立された。またマウイ島では1910年にラハイナ大神宮、1915年に^{マウイ}馬哇神社が創建された。ホノルルにも1906年の出雲大社教教会所を皮切りに、次々と神社が建っていった。

5) 『布哇開教誌要』[本派本願寺布哇開教教務所 1918] にもとづいて算定した。

6) 不動堂1を含む。

7) 広島、山口、岡山県人が多い。

2) 離村向都時代

日系人の離村向都化は、20世紀に入ってすでに顕著な現象となっていた。それに対応して、宗派の本拠地もホノルルに定められるようになった。1899年に建立された本派本願寺のホノルル本願寺は1905年ハワイ別院に昇格した。浄土宗は1907年開教院をホノルルに創建し、日蓮宗は1911年仮布教所をもうけ、曹洞宗は1913年に仮別院を建て、東本願寺も1916年に進出している。真言宗の開教院は1917年に開設された。

ところで当時の真言宗がどのように見られていたかを示す興味深い資料がある。真言宗が開教院をホノルルに建立し、入仏式に総領事を招待したところ、「真言宗は淫祠邪教に類した行いをするのみならず監督は低級な僧侶を庇護し、煽動して愚民を籠絡し金品を集めて糊口を凌ぎ、堂宇を建築したのであるから総領事館としては出席は出来ない」[布哇真言宗別院 1927: 68]と参列を拒否したというのである。この当時の真言系の宗教家が、加持祈禱や民間療法を駆使して移民の現世利益的ニーズに応えていたことは、容易に推察される。それが行政官の目には「淫祠邪教」的な宗教活動と映じたのであろう。

天台宗でも1915年、不動尊を祀る寺院がホノルルに建立された。これも本山による正式開教ではなく、天台系の修験者が加持祈禱を専門に行っていたようである。信者には他寺のメンバーが多く入っていたという[YOSHINAGA 1937: 42]。

神社もホノルルに続々と建立されていった。創設の順に記すと、出雲大社教会所(1906)、布哇大神宮(1907)、加藤神社(1911)、石鎚神社(1913)、カカアコ金刀比羅神社(1915)、布哇金刀比羅神社(1920)となる。このうち石鎚神社の三宅シナについては、事例研究の一つとして後述する。

ところで日本人の耕地労働者は、1905年の3万人から比べると1925年にはその3分の1に減少した。アメリカ本土への転航者、日本への帰国者もさきながら、多くの者は職を求めて都市に移動した。ホノルルにはモイリリやマキキ、あるいはリバーなどに日系人街と称しうるコミュニティが形成されていった。

本派本願寺は、今村恵猛の指導下でキリスト教式礼拝様式の採用など、仏教のアメリカ化を積極的に推進した。この時代は、本派本願寺中心の仏教界と、奥村多喜衛をリーダーとするキリスト教界が、耕地ストライキや子弟教育をめぐる激しく対立を続けた時代でもあった。

他方都市社会の底流では、病気治しを中心とする現世利益信仰を吸収する形で、新しい宗教が教勢をのぼした。天理教は、上野作次郎によるホノルル教会の設立(1929)以降の10年間に、教会数を21にのぼした。金光教も1926年に真道会まらちを結成し、1929年

にはホノルル教会が設立された。ヨガの行法をとり入れた調和道遍照教団(1929)、ジャーナリスト小林日種の始めた顕本法華宗(1930)、本派本願寺から離脱して「養生ようじょう万成ばんじょう」を説いた「仏凡通訳」高尾日尚の創唱になる真仏教菩提寺(1929)⁸⁾などが、1930年をはさんでホノルルで布教活動を始めている。

この時代の霊能者として注目すべきは、真仏教の高尾日尚と、1935年にパロロ観音堂を建立した松本妙清である。また二人よりやや遅れて戦争の直前から宗教活動を開始した平井辰昇も、是非ともとりあげなくてはならない霊能者である。松本と平井はともに熊本県出身(但し平井は婦米二世)の女性霊能者であり、両者については章を改めて詳述する。

3) 太平洋戦争時代

真珠湾攻撃により日米開戦の火蓋が切られると、宗教家をはじめとする日系人社会の指導者は一網打尽に逮捕され、一時オアフ島砂島に監禁された後、米本土の収容所に送られていった。戦争中、寺院や神社はほぼ全面的に閉鎖され、葬式を除く公的な宗教行事もほとんど禁止された。それにもかかわらず、霊能者による私的な宗教活動にまでは最初禁圧の手はのびなかったようである。パロロ観音堂の松本妙清は拘引されなかったし、得度した夫の晃観も2日間砂島に拘留されただけで帰宅が許された。また平井辰昇も戦争中期になって2年半の抑留生活を砂島で送ったが、それまでは自由の身であった。

戦時中の祈願として特記すべきは、二世部隊に志願した息子の無事帰還を願う母親が、霊能者を含む宗教家に息子の写真をあずけ、祈願してもらおうという風習であった。たとえば生長の家の教師は、戦場で闘う兵士の写真に向かって無事の帰還を祈っていた[HUNTER 1971: 195]。またパロロ観音堂でも、¹⁾写真を須弥壇に安置し、祈禱を行っていた。後日判明したことであるが、442部隊のある日系二世がイタリア戦線である女性の姿を認め、その後をついていった。あとで、元の場所に戻ったところ、そこは爆弾ですっかりやられていた。戦後、パロロ観音堂に参拝したところ、その女性こ

8) 高尾日尚(本名:真平)は1876年新潟県に生れ、1898年農業移民として渡布、数年後、米本土へ転航し、苦学してEmersons Institute of Efficiencyを卒業した。その後1924年に江間式身心鍛練法の免許を獲得、1926年カリフォルニア州ストックトンの本願寺にて出家し、1927年から本派本願寺ハワイ別院の今村恵猛に師事したが、教団内の軋轢のため身を引き、1929年にホノルルのエルム街に真仏教大本山菩提寺を創立した。仏凡一体、つまり仏と凡夫の即身成仏を体験し、自らを仏凡通訳と称し、霊肉救済のための養生を説いた。1935年、菩提寺布教宣言大講演会を開き、真仏教の宣言を行った。霊内の養生を目的に流動食や法水を用いた食餌療法を行う。病気そのものを治すことよりも、健康体をつくることに重点がおかれた。如来の力が加わった法水の摂取と黙想が、信者の日課となっている。高桑日尚編の『真仏教大仏典 菩提寺』(1966, 121 p.)は弟子の高桑が高尾の書いた聖典の一部をまとめた本である。

そまさしく松本妙清だったという。

4) 都市時代

戦後、抑留生活から解放された宗教指導者はハワイに帰還し、一時期途絶えた宗教活動の復興に力を注いだ。但し神道界の復興は、神社の返還が遅れたり、神職の追放運動などのため、大幅にたち遅れた。

仏教では本派本願寺の YBA 活動をはじめとし、二世・三世の宗教活動に本格的に力を入れ始めるようになった。そのためには英語による布教が必要不可欠となり、二世の開教使の誕生をみた。最近では英語の話せる日本人開教使の数も増加している。にもかかわらず、英語の布教が軌道にのって成功したというわけではなく、また日本語による布教・教化の必要性も残っており、英語と日本語の併存する時代がもうしばらくは続きそうである。なお、寺院運営面での実権は、二世・三世へと確実に移行しつつある。

戦後の仏教界の動きの一つとして、ハワイ仏教連盟 (Hawaii Buddhist Council) も注目されてよい。これは1946年に再編成され、花祭や成道会などを共催するとともに、所属宗派 (本派本願寺、東本願寺、曹洞宗、浄土宗、日蓮宗、真言宗、天台宗) の調整機関として機能してきた。しかしハワイ仏教連盟に所属しない仏教系宗教団体もあり、霊能者の多くは仏教連盟の枠外におかれている。なお、最近仏教界に波紋を投げかけている動きに、本派本願寺の改革運動がある。これは「親鸞に帰れ」をモットーとする一種の信仰純粋化運動であり、葬式時に他宗僧侶の助動を拒否したり、家庭の仏壇から位牌を撤去させたりするため、一部には軋轢が生じている。

ところで、戦後宗教史の顕著な特徴の一つは、日本から大小の新宗教教団が波状的にハワイに進出したことであろう。布教が正式に開始された順に追ってみると、天照皇大神宮教(1952)、世界救世教(1953)、立正佼成会(1959)、日蓮正宗創価学会(1960)、パーフェクト・リパティ(1963)、真如苑(1970)、本門仏立宗(1973)、辯天宗(1974)、最近では真光文明教団、霊友会、天神教などがある。これらの各々についてここで詳説する余裕はないが、その多くは先祖供養・現世利益・精神修養を中核に布教・教化活動を展開している。本稿でとりあげる女性霊能者の宗教活動と重なる部分も多いが、彼女らより布教性・組織性をもつ点で一応区別される。

最後に、都市スプロール化に伴う宗教分布の変化について一言触れておきたい。1960年代以降ホノルルは観光地として急速な発展を示し、ホノルル自体の膨張もさりながら、近郊に新興住宅地を次々に生み出していった。それに伴い、たとえば本派本願寺はカイルア本願寺を新設し、ついでミリラニ本願寺の建立を計画している。立正

校成会の教会はパール・シティの住宅地域内に建ち、また最近の霊能者も新興住宅地域から生れる傾向にある⁹⁾。反面、日本人街の中に建てられた神社の幾つかは著しく衰微し、モイリリ稲荷神社のように最近消滅したところもある¹⁰⁾。

Ⅱ. 事例研究

1. 三宅シナと石鎚神社

広島県出身の三宅シナは1913年に神がかりし、その神は四国の霊峰石鎚山の神とされた。翌年、三宅シナは修行のため日本へ帰国した。そして1918年石鎚神社から分霊を受けて帰布し、モイリリの日本人街にハワイ石鎚神社を創設した。1927年三宅シナが日本へ帰った後、弟子の木村富次が跡を継ぎ、今日に至っている [井上 1979: 69]。

三宅シナの生涯、宗教体験、宗教活動等について、詳しいことはまだよくわかっていない。ただ1913年の創立当初から石鎚神社の信者である NM 夫人から、以下のような話を伺った。

NM 夫人は1913年に写真花嫁として大分県からハワイに嫁いできた。20才の頃で

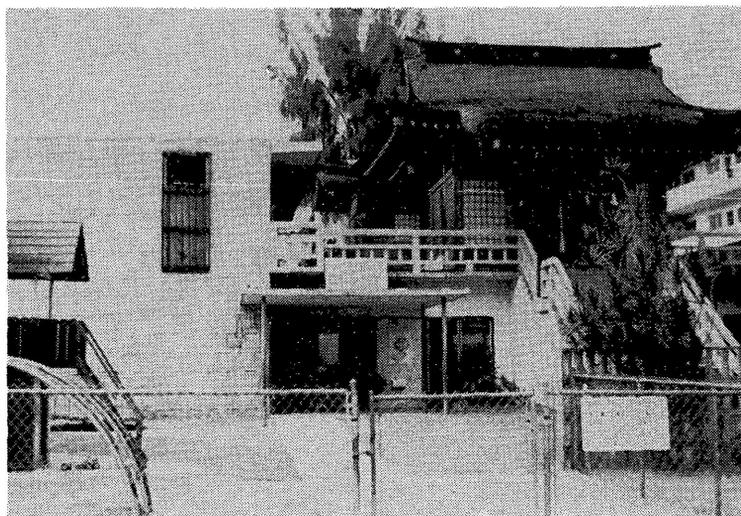


写真1 石 鎚 神 社

9) ホノルルの慈久ローズ、エワの酒井幸照、マカキロの林生道は、いずれも住宅地域内の自宅
で宗教活動を始めた。

10) 1979年閉鎖されたが、建物は日系人の募金活動によりワイパフ公園に移築されることになっ
た。

ある。やがて月満ちて子供が生まれた。しかしどうしたことか赤子は両目をわずらって、1カ月位、目が開かなかつた。この間、医者にもかかつたが快癒せず、困りはてたあげく三宅シナに見てもらふことになつた。彼女はまず神を拝み、病氣の原因は何かの祟りであることを告げた。そして子供の目に水を注ぎ、手で目を押えてくれた。夫人はその治療をうけるために毎日足を運んでいたが、ある時三宅シナから「疑うのなら帰れ」と厳しくいわれ、恐ろしい思いをしたという。三宅シナはテーブルの上など少し高い所に坐り、石鎚の神の言葉を取り次いでいたが、世間では「石鎚の神さまは荒い」との評判だつた。ともかく百日後位には、三宅シナのおかげで子供は目は快癒した。夫人はそれに恩を感じ、以来ずっと石鎚神社に参詣を続けている。子供が病氣の時などは、深夜体を清めて石鎚神社に行き、境内で御百度詣りの祈願を一所懸命したこともあるという。なお夫人は四国の石鎚山本社には二度参詣したことがあり、そこで御百度も踏んだという。今でも夫人の寝室には、三宅シナの写真が飾つてある。

カリスマたる三宅シナがハワイを去つてからは、修祓や大祭などの活動が主となり、儀礼中心の神社とさして変わらなくなつてしまつた。

なお戦時中接収された神社施設は1954年に解除となり、1963年には約10万ドルで現在の社を完成した。しかし都市計画のため日系人が郊外などに分散してしまい、大祭時でも参詣者はせいぜい百名程度である。それも高齢者が多く、二世・三世への対応が成功しているとはいひ難い[井上 1979: 69]。木村富次も1979年現在では89才の高齢に達している。

2. 松本妙清とパロロ観音寺

まず、松本妙清の生い立ちから、宗教体験を経て、「お助け」という宗教活動に至るまでをまとめてみよう¹¹⁾。

松本妙清は1883年熊本県玉名郡天水村（現天水町）に生まれた。生家は浄土真宗だったが、幼少の頃、病弱だったせいもあって、近くの鹿本郡菊鹿村（現菊鹿町）の相良観音（天台宗相良寺）によく参詣していた。17才の時、眼病を患い、目を開けていながら見えないという失明状態に陥つた。しかも正氣を失つた状態で口早にいろいろしゃべつたので、周囲の人々は気が狂つたのかと思ひ嘆き悲しんだ。親や親族は徹夜で看病し、医者もよばれた。その間、夢となく現となく観音が現れて、「お前は不幸な病氣で苦しんでいる人を救うように」との言葉を妙清にかけたという。すると不思議

11) 主として下記の新聞記事を参考とし、松本知晃およびNM、STとのインタビューによってそれを補つた。『布哇タイムス』1951・4・8。『布哇報知』1958・7・5。『布哇報知』1965・7・3。

議なことに翌日の昼頃には正気をとり戻し、すっかり回復したのである。後年、松本家に嫁し、1917年、34才の時に夫千蔵と共にハワイに移住した。最初はハワイ島で暮し、後にホノルルのパロロに居を構えるようになった。千蔵はペンキ請負や野菜販売を行い、妙清は染物を業としていた。生活に不自由はなかった。1932年、更年期を迎えていた妙清は再び大病にかかった。体が動かなくなり、死すら覚悟していた時、またもや観音が現われ、「御身にわが片腕をささげるほどに病氣の人を助けよ」との言葉が妙清にかかったという。すると病状は不思議と回復した。二度までも観音の靈験を体験した妙清は、決心して靈能者としての道を独力で歩み始めたのである。妙清による最初の「お助け」を受けたのは、モイリリに住む知人のTSだった。医者にかかっても痛みがとれなかった彼の右肩に、妙清が右手を数十分当てたところ、不思議なことに痛みがとれたのである。妙清自身も半信半疑で、翌日見舞いかたがたTSを訪問したところ、全快を喜んでいたという。その日の朝、今度は見知らぬ人から‘マッサージ’依頼の電話があった。それはTSから聞きつけて、さっそくかけてきた電話であった。請われるままに出かけ、退院直後で体の痛みが治まらなかった婦人に妙清が30分ほど手を当てたところ、これまた不思議に痛みが消えたという。またこの婦人の娘も腿に疾患をもっていたが、それも治ってしまった。これが最初の病氣治しの「お助け」であった。

当初自宅の一部を改造して堂の代用とし、3年後の1935年によくパロロの現在地に住宅を買い求め、東京浅草寺より観音像を迎えて本尊とし、「東京浅草寺観音靈

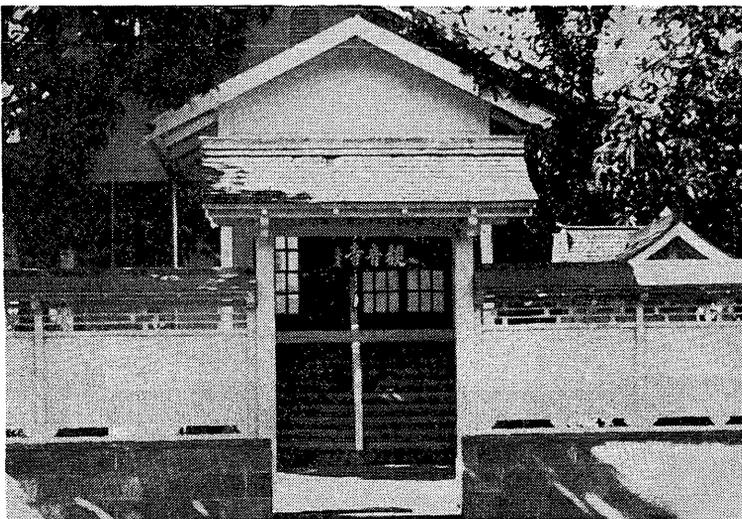


写真2 パロロ観音寺

場パロロ観音堂」の看板を掲げるに至った。

妙清の霊能力は観音から力を授かったとされる右手に集中していた。観音の働きによって右手が自然と体の悪い部分に行き、その霊力を伝えたというのである。子宝に恵まれぬ者にも観音の霊験はあらたかであった。この霊能力を頼って悩める人々が妙清のもとに押しかけた。右手の力で難病の人を何百人治してあげたか分らない、と後年妙清は語っている¹²⁾。跡継ぎの知見によると、妙清は予知能力にも優れていたようである。胎児の段階で男女の判別ができた、妊婦に出産の急を知らせたりしたという。このほか灸の心得もあり、それを治療に採用していた。呪符の類では、浅草寺の御札や御守りを使用していた。御札の紙を細かくちぎって水とともに呑んだり、伴創膏を患部にはったりする方法も用いていた。また戦前妙清がまわった西国33カ所観音霊場と浅草寺・相良寺の砂を用いて、時々「お砂踏み」の行事を行っていた。

松本妙清は霊能力のみならず、人格的にも人を惹きつける魅力をもっていたようである。石鎚神社同様パロロ観音寺の熱心なメンバーでもあるNM夫人は、松本妙清はやさしい人だったという。またメンバーの一人STによると、明るくて親しみやすく、時にはビールなどもたしなみ、冗談を言っでは周囲を笑わせるタイプだったという。メンバーには松本夫妻と出身を同じくする熊本県人が多く、「熊本県クラブ」の様相を呈し、気のおけない仲間うちの雰囲気満ちていたという。今でも熊本系が半数以上を占め、熊本色はいぜん濃厚である。

妙清は1959年に亡くなった。妙清の死に際し、枕経をあげたのは浄土宗の開教使であり、葬儀の導師を勤めたのは本派本願寺の開教使であった。また本派、曹洞宗、浄土宗、真言宗の監督・開教使も多数葬儀に参列している。祈禱寺院として定着したパロロ観音寺の隠れた一面がここにかがわれる。

妙清の跡は息子の知見が継いだ。知見は1954年から1958年にかけて駒沢大学で仏教を学び、休暇中には相良寺で修行をして僧侶の資格を取得した。知見は幼少の頃から母の信仰する姿を見ており、また母と一緒によく御百度を踏んだこともあり、母の跡を継ぐ宿命のようなものを感じていたという。これに対し、知見の姉は寺を継ぐ意志をもたず、とくに霊力もなかった。知見といえども母のような霊力はなく、加持祈禱や行事を中心に寺を維持している。しかし治療の方法などに継承が認められるものもある。たとえば按手の加持や灸などである。

現在の主な行事は、1月の新年宴会、3月の7カ所巡拝、7月の大祭、8月のピクニックである。これに時々「お砂踏み」が加わる。7カ所巡拝とは、オアフ島の観音

12) 『布哇タイムス』1951・4・8。

霊場をバスで一日かけてまわる巡礼旅行である。真言宗が始めた7カ所巡拝を、パロロ観音寺でも真似して行ったのが発端である。実際は7カ所以上参詣するのだが、名称はそのまま踏襲されている。観音巡礼ともいう。1959年3月の場合、巡拝の順序は次の通りであった。

—パロロ観音寺発

- ① マカレー大師堂
- ② 真言宗別院
- ③ 曹洞宗別院
- ④ リリハ醍醐分教院
- ⑤ 真言宗弘法寺
- ⑥ ホノルル大師堂（大日堂）
- ⑦ ポンチボウル国立墓地
- ⑧ ワヒアワ地藏尊，霊石¹³⁾
- ⑨ ハレイワ真言宗弘昭寺
- ⑩ カワイロア曹洞宗龍潜寺

—ワイルア，カフク，プラルー経由でパロロ観音寺帰着

1964年の場合も、順序は若干異なるが同一箇所を巡っている。ところが1979年になると巡拝箇所やや変更がみられる。まずホノルル大師堂がなくなった。つぎにカワイロア龍潜寺がワヒアワに移転し、龍仙寺と改名し、ワヒアワ地藏尊を境内に祀るようになったため、ここは一カ所となった [中牧 1980: 102]。そして新たに1974年創立の天台宗別院とワイパフの曹洞宗太陽寺が追加されている。1979年には170名位の参加者があり、バスを3台連ねて巡拝した。

7月の大祭は、7月10日の四万六千日に一番近い日曜日に行われる¹⁴⁾。1979年は7月8日に当り、午後2時半すぎから約45分間にわたり、松本知見，荒了寛（天台宗総

13) この霊石はワヒアワの healing stone として一時期爆発的な信仰を集めた。1925年春ハワイアン人の娘がクカニロコの王族の誕生地にマークをつけるため、分娩の際にしがみついたといわれる石をワイヤで囲った。公的儀式がすんだ後、その石の霊力と靈験についての噂が日本人や中国人やフィリピン人などの間に急に広まった。というのは、その石に供物をそなえ、さわったりキスしたりすると、病気が治り、幸運もたらされると宣伝されたからである。この噂はオアフ島はおろか他島にまで広がり、ついには賽銭箱まで置かれるようになった。そのうちホットドッグ、レイ、ローソクなどの売店も立ちならぶようになり、はては聖水売る者も登場した。しかし事態を憂慮した Board of Health が不衛生的で健康に害があると宣言してから、急に熱狂もさめていった [LUM and MIYAZAWA 1942: 20-24]。現在地はワヒアワの California St. に面し、龍仙寺の近くである。healing stone をおおうコンクリートの建物は、1947年10月15日に稲嶺ウミト，桑江カミ等（不明1人）3名によって建立された。

14) 東京浅草では、7月10日の四万六千日の縁日には、ほおずき市がたち、参詣人でぎわう。

長)、慈久ローズ(天台宗高岩寺)、沖村栄昇(真言宗弘法寺)の4名によって法要が営まれた。ついで真言宗の御詠歌舞踊の披露をはさんで、松本知晃住職、観音講会長、日本人連合協会副会長の挨拶が続き、最後に荒了寛総長の説教で締めくくられた。時間は4時半頃であった。このあと全員で食事をとり、余興の部に入った。例年の如く、富士山を描いた幕をバックに、日本舞踊や日本民謡などが有志によって披露された。

8月のピクニックはアラモアナ公園で行われる。妙清の代から続いているもので、80~100家族が参加するという。ピクニックでは、飲んだり、食べたり、喋ったり、ゲームをしたりして、楽しく一日をすごす。このピクニックは、休日を利用して県人会・村人会・宗教団体等の各種団体が親睦のために盛んに行っているものとさして変らない。

「お砂踏み」は10年に1度位の割合で行われる。最近では1971年10月10日に行われた。仮祭壇には、西国第1番から第33番まで順番に本尊の絵姿を並べ、饅頭、梨、オレンジの供物をそなえ、花を飾り、ローソクを立て、正面に抹香(線香)用の香炉を置く。その仮祭壇の手前下方に「お砂」の袋を置き、白布をかぶせておく。その上を踏んで巡拝するのである。33カ所以外に浅草観音と相良観音が加わるので、都合35カ所となる。この時は300人以上の人々が巡拝したという。「お砂踏み」の主たる目的は、日本の観音霊場を巡拝できない人の参詣にある。ちなみに、前年の1970年には、西国33カ所巡礼と大阪万国博覧会見学を組み合わせて26日間の旅行を実施した。西国巡礼には12日間かけている。参加者は22名であった。

最後に、パロロ観音寺はずっと単立寺院として存続してきたが、1974年天台宗海外伝道事業団がハワイに別院を創設するに及び、天台宗の傘下に入った。ただし、組織的には自主独立の傾向が強い[中牧 1979d: 30]。教義面でも、特定宗派に偏らない一般的な仏教の教えを心がけているという。なお観音講員は約120名、婦人会員が約220名いる。檀家に匹敵するのは10軒前後であるが、盆の棚経には50軒程まわっている。

3. 平井辰昇と東大寺布哇別格本山

1) 東大寺布哇別格本山の沿革¹⁵⁾

東大寺布哇別格本山は開山人平井辰昇によって創立された。奈良の東大寺で4年間の修行を終えた平井辰昇は、1941年6月23日、同寺初の海外派遣開教使として生地

15) 東大寺の沿革と現状に関しては、拙稿参照[1979e: 36-38]。なお平井辰昇へのインタビューの他に、平井辰昇著『母の信仰に導かれて』[1957]、『布哇報知』『布哇タイムス』などの資料を利用した。

ハワイに戻り、ホノルルで布教を開始した。当初は船中で知りあったT夫人宅に寄寓し、数カ月後、信者が200～300人に増えたところでマカレーのワイオラ街に一軒家を借り、「不動院」の看板を掲げた。しかし、同年の暮に太平洋戦争が勃発し、平井辰昇も戦争の中盤に至って拘引され、オアフ島砂島のホノウリウリで二年半の抑留生活を送った。

戦後、抑留所から解放された平井は、最初信者宅に身を寄せ、のちに新聞広告で見つけたルナリロ街の借家に移転した。この頃の平井は、加持祈禱中心の宗教的救済活動に専念する一方、敗戦国日本に対しララなどを通じて義捐金や義捐物資の援助を盛んに行った。

1948年3月、「不動院」には「東大寺布哇別院」の呼称が許された。平井は1949年、再修行のため帰国し、東大寺で2年間それに打ちこんだ。1949年10月21日には、東大寺戒壇院において菩薩大戒を授与されている。1951年にも東大寺で修行し、十八道加行を完遂させた。

1950年、パリ・ハイウェイから少し横道に入ったジャック・レーンに、寺院建立のための敷地を購入、建設に着手した。この工事は8年3カ月の歳月を費して1958年に完成した。これには、政府から無償供与をうけた石材を10カ月かかって運び出すなど、休日を返上した信徒の労力奉仕によるところが大きかった。平井も敷地内に建立された滝場に、早朝4時半から通い続けた。加持祈禱中心の宗教活動により寄付を仰がず女手ひとつで着実に進行してゆく建立事業が、宗教界やジャーナリズムの注目を惹き、



写真3 東大寺ハワイ別格本山

さまざまな波紋を投げかけたのも、この時期であった。

かくして東大寺布哇別院は、1955年10月1日、「華嚴宗東大寺布哇別格本山」の名称を許可され、1956年7月8日には本尊不動明王像の開眼法要を執行するに至った。伽藍は1958年ようやく落成したが、それまでに先述の滝場のほか、懺悔堂、鐘楼、茶室「華昇庵」、日本家屋などが境内に完成した。また開山上人平井辰昇の等身大の銅像も、信徒の強い希望により境内に建立された。

2) 霊能者としての平井辰昇

平井辰昇はハワイ島コナに生まれた。父平井嘉八は、19才で寺小屋を終え、1879年頃留学生として米大陸に渡り、ホテルのボーイや皿洗いなどをしながら苦学し、20年程の在米生活を送った。その後一旦帰国して結婚、再び渡米をはかり、途中ハワイ島に立ち寄った。そこで妊娠していた妻が長女を産んだ。かくしてハワイ島に留まることになり、コーヒー栽培に従事した。辰昇もそこで生まれたのである。辰昇11才の時、家族は日本へ帰国した。

辰昇の母は夫の死後、東大寺鷲尾隆慶長老から得度を受け、女富^{めふ}を名のった。女富の実家吉川家の先祖は、源平の戦に敗れ熊本の村に定着した平家の落人といわれ、代々勸願寺などをつとめた家柄であったという [平井 1957: 12]。吉川家はまた天神の小祠とも深い関係があり、女富自身、滝行や断食行を通して病人加持を行う霊能者でもあった。

さて、辰昇は、熊本県飽託郡で小学校を終え、熊本市の私立高女に入学した。そこを卒業してまもなく、再びハワイに戻り、日系二世のTと結婚した。しかし辰昇とTとの結婚生活は11年目に破局を迎えた。性格や考え方の不一致、Tの放埒などが原因だったようである。そして一人淋しく日本に帰った辰昇のもとにTから離縁状が送られてきた。その時には、悲しみのあまり母の膝元で子供のように泣きじゃくったという。それから苦悩の末、一度は服毒自殺をはかったが、母に卵の白味を無理矢理飲ませられ、毒物を吐き出して一命をとりとめた。当時は毎日のように母に心中を迫っていた。それに対し女富は、修行をしたら一緒に死ぬと約束し、仏門へと辰昇を導いた。まず佐賀県の華嚴宗寺院で修行を始め、後に奈良の東大寺に移って修行を積んだ。かくするうちに自殺の思いは遠のき、修行自体に生甲斐を見出すほどに気持が変化していった。かくして4年間ほどの修行を終えた辰昇は、「宗門に花を咲かせたい一念」と「Tを見返したい一念」でハワイ開教を決意したのである [平井 1957: 7]。もちろん母に対する報恩感謝の思いも強烈であった。

平井辰昇の宗教活動を支える原動力は、「死線を越えた」東大寺の荒行もさりなが

ら、離婚体験と母女富の信仰によるところが大きい。平井辰昇著『母の信仰に導かれて——東大寺ハワイ別格本山縁起』の題名が暗示しているように、女富の性格と信仰が辰昇に大きな影響を及ぼしている。それは辰昇の個人的性格のみならず宗教活動全般にわたっている。

女富は「気丈夫なたちで、いわば賢母型だった」[平井 1957: 1]というが、同時に厳格で気位が高かったようでもある。そのことは、一人修行のため残る辰昇に、「立派な僧侶になっておくれ、決して乞食坊主になっておくれな」とか、「家名をキズつけぬように命がけの修行をして、人の笑われ者にならぬように」と言い残した励ましの言葉のなかにうかがわれる[平井 1957: 6]。また修行のため日本に帰った辰昇に対し「1セントの寄附も仰がず、自力で宗門のため、千年も持つような立派な寺を建立しなさい。それが出家としての本当の親孝行です。それが成就したら、私もお祝いに渡布しましょう」と約束した厳格な態度にもうかがわれる[平井 1957: 10]。このような女富の性格は辰昇にも受け継がれている。本人も自認するように「いささか女らしさに欠ける」場合があり、たとえばインテリの男性信者たちを散々ののしって泣き伏させてしまうこともあったという[大世界 1957: 90]。また母の教えの通り、寄付行為にも厳しい態度を貫き通している。他人からの施しや寄付は一切受け付けず、ましてや会費を徴収することもなく、賽銭のみで寺院を建立・維持してきた。

女富の霊能者的性格も辰昇に受け継がれている。また女富の信仰や宗教活動も、東大寺で修法した教義や儀礼とともに、辰昇の宗教活動の根幹をなしている。もちろん辰昇自身の創意や独自性も認められることは言うまでもない。そこで、個々の事例を順次検討しながら、その影響関係をみてみよう。

a) 魂よばい

屋根にのぼり死者の名を大声で呼ばれる魂よばいの風習が、広く中国・日本でみられたことはよく知られている。屋根にこそそのほらないが、同様の方法で、女富は長女の魂を呼び戻したことがある。長女が10才頃のこと、すでに入棺を済ませた後で長女の名を呼び続けたら息を吹き返したという。辰昇も一年に3人、霊を呼び戻したことがある。一例をあげると、脈搏の切れた女性を激しく叩き、男のような大声で呼ばわったら、意識をとり戻し、そのまま元気になったという¹⁶⁾。

b) 霊媒・告知

癩病の疑いがある某夫人に対し、平井辰昇が仏前で霊媒を試みたところ、「ライラ

16) 病気の原因は、夫の兄の怨みをかい、その生霊にとりつかれたためとされた。

イライ」と出た。そこでクリニックに診察してもらったところ、実際その通りだった。医者はモロカイ島の癩病施設に送ろうとしたが、夫人は行きたがらなかったため、東大寺で引き取った。ただし夫人の夫に別部屋を建てさせて隔離した。こうして、夫人の癩病は辰昇の加持により6カ月で全快したという。

霊の「お告げ」は突然くだる。護摩法要の最中、平井辰昇が突然「水で死んだ人がいる」と叫んだことがある。そこで助勤をしていた姪が、信者の間をまわり、該当者の有無を聞いてあるいたところ、それらしき心当りのある信者が名のり出た。辰昇は姪に指示して、その霊の名前を護摩木に書かせ、火に投じて供養した。そして「水で死んだ人が助けて助けてとここに来ておられる」と信者に説明した¹⁷⁾。

霊のさわりは主に霊媒によって判明する。病気の原因は、多くの場合、霊のさわりに帰せられる。霊には先祖、親族、知人などの死霊や生霊の場合もあれば、犬や蛇などの動物霊や、三月荒神や水神などの神霊の場合もある。

c) 霊 供 養

上記の諸霊に対し、供物を献じ読経して供養するのが、霊供養である。ごく日常的に行われるのは先祖供養である。父方母方を問わず、嬰兒までを含め、すべて知りうる限りの霊を毎日供養するのが基本である。平井辰昇は、毎朝、平井家と吉川家の先祖の菩提を弔うだけでなく、食前には両家の先祖に召し上れと祈りをささげる。

盆の精霊流しには、霊送りとともに霊供養の観念が濃厚にみられる。東大寺では、毎年7月16日、寺での施餓鬼供養の後、アラモアナ海岸に信者を集めて精霊流しを行っている。信者の家族は、小舟や段ボール箱に食物を満載し、それを死者の霊と共に海のかなたに送るのである。

霊媒によってさわりの原因が先祖供養の怠慢に帰せられる頻度はかなり高い、と推定される。平井辰昇にとって信者の先祖を供養することは、勤行の重要な日課でもある。信者は霊供養を望む死者の名前を記した紙を持っており、これを毎回差し出して供養を依頼する。病気が治った後でも、先祖供養の必要性は永遠に持続し、これが東大寺への参詣を促進する一要因となっていることは否定できない。

先祖供養の実態をクエスチョネアの統計によって見てみよう。まず仏壇の所持率では、44例中40 (90.9%) と高率を示している。ちなみに本派本願寺 (96.3%)、創価学会 (98.8%)、立正佼成会 (87.5%) が極端に高く、天照皇大神宮教 (1.6%)、キリ

17) 法要後、信者の一人は筆者に対し、「御先祖様が霊媒にでられた。御上人さまには皆わかる」と説明してくれた。

スト教(10.4%)が極端に低い[柳川・森岡 1979: 83]。次に彼岸, 盆, 法事をみると, これまたそれぞれ86.4%, 90.9%, 79.5%と高率を示している。ちなみに本派本願寺は70.4%, 85.2%, 85.2%, 立正佼成会は72.9%, 85.4%, 75.0%と同一の傾向を示し, 天照皇大神官教やキリスト教と対照をなしている[柳川・森岡 1979: 84]。

神霊に対する供養には, 次のような例がある。ある人が手に膿をもったが, それは川に小便をしたからであり, 水神の罰が下ったとみなされた。そこで塩, 米, 酒を水神に供え, 悔い改めさせた後, 辰昇が手の部分を加持したら治ったという。東大寺では一般に懺悔も供養とともに治癒の重要な契機となっている。

d) 憑きもの落し

憑きものとみなされる霊は死霊, 生霊, 動物霊に及ぶ。落す方法は同一である。毎週月曜日の晩に憑きもの落しが行われる。まず, うつ伏せに寝かせ, 背中にバスタオルを当てる。百万遍法要用の数珠を袋に詰め, 脇に坐った信者がバスタオルをあてがった部分を叩くのである。この時平井辰昇は頭や肩を押えつけながら口ぎたなくののしる。悪態をつかないと落ちないからである。たとえば「さあさあ戻れ戻れ戻れ, こん畜生, ○○○(実名) しゃんしゃ戻れしゃんしゃ戻れ, こん畜生根性ばかりまわしやがって」。叩き役の信者もそれに和して「戻れ戻れしゃんしゃ戻れ」などと唱える。手のあいている信者は, 足をマッサージする。1人10~15分位叩かれた後, 他の者と交代する。憑く生霊には, 近親者や信者仲間, しかも女性が多いようである。夫

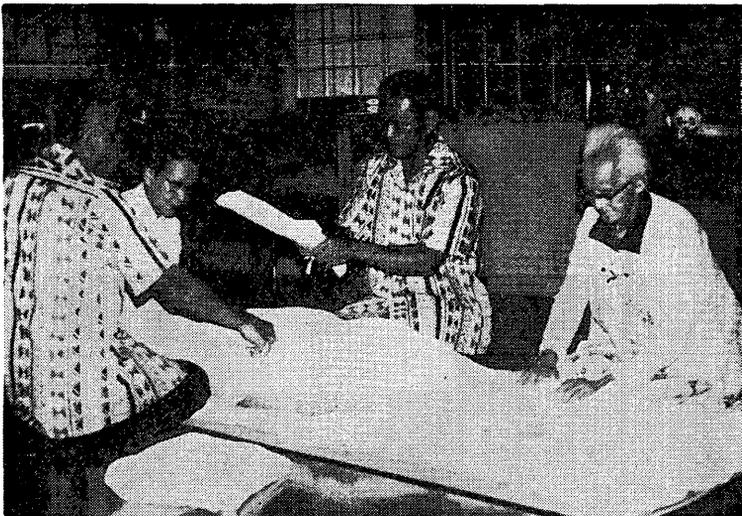


写真4 東大寺の憑きもの落し

婦の間でも憑くし、日本の生霊・死霊がつく場合もある。かつては動物霊が憑いたこともあり、狐が憑くとキャンキャン鳴き、犬神が憑くと舌を出して四つんばいになり、蛇が憑くと飛んだりくねったりしてドアから出ていったという。

e) 加持祈禱

加持祈禱は霊供養とともに東大寺の宗教活動の両輪となっている。加持とは、一般に仏の加護を意味し、密教では三密加持と称し、「仏の絶対の慈悲が信仰する人の心に加えられ、そこで信仰する人が仏の慈悲を感得する」とされる [勝又 1972: 491]。しかし修験道の加持は「本尊加護の力、行者持念の力と和合して利益を施し候こと加持の義なり」と説明される¹⁸⁾。東大寺の加持も修験者のそれに近く、本尊加護の力と平井辰昇持念の力の和合、と考えてよい。祈禱は言うまでもなく、神仏への祈願を内容としている。

平井辰昇による病人加持は、手を当てる按手加持の方法が主体である。これは女富から辰昇に継承されたものである。按手の際、紙をあてがう場合もあり、般若心経をとえながら、親指で強く押えたり、叩いたり、息を吹きかけたり、気合をかけたりする。九字もきる。加持の行為には「自然さ」が強調され、手や指が自然に動くという。また息吹も自然に出るという。五体以外に数珠を用いて加持をする場合もあれば、ビニール袋に入れた納経帖をあてがう場合もある。前者には護摩で浄めた数珠を用い、後者は1978年に四国八十八カ所を巡礼した時のものである。

加持のための「持念の力」は、もっぱら行に由来する。女富同様辰昇も行を法力の源泉として最重要視する。奈良の東大寺が観光客で賑うのとは対照的に、ハワイの東大寺は物見高い訪問者を拒絶する。東大寺の門には No Visitors のマークが貼りつけられ、断食堂の側壁には Keep Out Trespassers Will Be Prosecuted の表示がある。これも辰昇が自坊を修行の道場と心得ているからにほかならない。辰昇はかつて新聞記者の質問に答え、「ここは拝む寺で見る寺でない」と語った。加持祈禱を希望しない者には最初から入門を断るという姿勢が、ここにもうかがわれる。したがって特別の用事がない限り、平井はいっさいの外出を控えている。加持と並ぶ祈禱は、とりわけ護摩法要と結びつき、信者の諸願を不動明王に祈願する形をとっている。東大寺本堂の須弥壇の左横には護摩壇がある。護摩法要は1977年以前は月2回、すなわち15日と不動尊縁日の28日に執行されていた。しかし多忙のため後者は1977年に廃止された。15日の護摩法要は午後5時前から始まり6時すぎに終る。所要時間は約2時間、

18) 天保12年(1841)に本山派・当山派が提出した『修験十二箇条』による [宮家 1970: 290]。

省略は行わない。もっとも一般の信者は6時頃からぼつぼつ集り始める。この間祈願を書きつけた護摩木と、そうでない護摩木の双方を焚く。また信者の所持する数珠を集めては、助手役の青年がそれを護摩の火と煙で浄める。百万遍法要と同時に憑きもの落しにも用いる大数珠も、この時浄められる。護摩のあと、心経の読経が20分程続き、最後に辰昇が一人一人に加持をしてまわる。

護摩の中でも二月に勤修する星祭は、特別に重要な行事とみなされている。東大寺の御守はこの護摩によって浄められ、信徒に分与される。また洗米も配られる。これを病気の時などに食べると御利益があるという。

加持祈禱にかかわる東大寺の本尊格は不動明王であるが、その他にも神仏を祀っているの、ここで整理しておこう。

本堂内

不動明王(数体)、千手観音、地藏菩薩、阿弥陀如来、薬師如来、弘法大師

境内

滝場 不動明王、水神

懺悔堂 弘法大師

断食堂 大権現、聖武天皇(写真)

鵜土の園の天神社 天神

地藏堂 地藏菩薩

なお、開山上人辰昇菩薩像は、境内の銅像と本堂内の木像とがある。しかし、祈禱・崇拜の対象となっているわけではない。

ところで東大寺の信者は、加持祈禱による救済の体験者で占められるといっても過言ではない。クエスチョネアも、健康上・精神上的の悩みが圧倒的に多いことを示している[柳川・森岡 1979: 132](表6)。

表6 メンバーになった時かかえていた特別な問題(東大寺)

健康上の悩みや問題	30	68.2%
経済上の悩みや問題	1	2.3%
家族関係や人間関係の悩み	4	9.1%
精神的悩み	6	13.6%
ばく然とした不安	2	4.5%
その他	6	13.6%
合計	49	111.3%*

* 複数解答を認めている。

眼病、心臓病、胃腸病、リウマチ、アレルギー等々数えあげればきりがなし。不安や心配などの解消にも加持は役立っている。平井辰昇は加持祈禱を恥じるどころか、人を信仰生活に導くことによって心理的療法を行う優れて科学的な方法として積極的に打ち出している[平井 1957: 38-45]。

f) 行

平井辰昇が修する主たる行は、滝行と断食行である。両者とも母に強く影響されている。奈良東大寺で十八道加行を修行中の1949年、辰昇は滝場を新設している。そして1950年には、私費を投じてその近くに不動堂を移築した。しかも自分で行ずるだけでなく、東大寺の僧侶や婦人達に対しても滝行を指導した。ある時は零下16度の中で、ある時は口から血を吐きながら行を続けたという。滝行によって声もつぶれた。

ハワイでも寺院建立に先立ち、1951年に滝場をまず創設している。1951年12月16日からは、先述のように早朝4時半から滝行に通いつめて祈願した。70才になった今でも、滝行は毎日のように続けている。

ハワイ東大寺の滝は男滝と女滝にわかれている。しかし“女ではない”辰昇は男滝を使う。滝水には水道を利用している。この滝には不動明王と水神を祀っている。この石像の不動明王像は、終戦直後、FBI から入手したものである。というのは、ある日「不動さまを迎えに行くように」との「お告げ」が辰昇にくんだり、FBI の係官に連れられて、倉庫のようなとある建物の廊下を歩いていた時、突然靈感で不動明王の在所がわかったという。実際、辰昇の指示した箱が的中していたという。水神のほうには御幣を立てている。その切り方は、母から伝授された。

断食行は癌などの重病人を治す時に行う。その期間中は、1日に6～8カップの水をのみだけである。ただしレモンを絞ってそれに加える。これはガンジー方式を採用したという。なお、戦時中、抑留所において、ハンガー・ストライキに見せかけて断食行を行ったことがある。

奈良東大寺で修行した座禅行を、一時、ハワイでも試みたことがあった。1950年にそれを始めたが、寺院新築工事中は中断し、1956年9月に再度復活した。当初、精神統一と懺悔を目的に100名を超える参禅者が金曜日の夕刻集った、と当時の新聞は報道している¹⁹⁾。

平井辰昇の日課をみると、一日が加持祈禱と修行で明け暮れる実態がよく理解できる。起床は2時半、以前は2時だったという。洗顔のあと、供物の用意をしたり、花の水をとりかえたりして、朝の勤行の準備をする。滝をとることもある。5時に梵鐘を鳴らす。軽い朝食をとり6時から勤行を始める。平井家・吉川家の菩提を回向し、世界平和を祈願する。7時からは信者のための勤行となり、信者の双系の祖先を回向し、諸願を取り次ぐ。信者の参拝もみられる。法要後、信者個人に対する加持祈禱を行う。土・日には9時半から2度目の法要を行う。そしてようやく11時頃法要が終り、

19) 『布哇報知』は1956年10月8日付、『布哇タイムス』は1956年10月15日付で掲載している。

昼食となる。午後は掃除や滝行にあてる。また週1回御百度を踏む。夕食は軽くとり、7時には就寝となる。但し火曜日は休息日とし、個人的な活動にあてている。

g) そ の 他

日本的な民間信仰と関係の深いことがらで、今まで触れていなかったものをいくつか列記しておきたい。

① 地蔵流し

7月24日の夕刻、子供が水に流れないように、病気にならないよう、真言と共に唱えながら、地蔵の印を押した半紙をアラモアナ・ビーチで流した。しかし辰昇の母が1962年に亡くなり、それ以降中止となった [中牧 1980: 102]。

② 塩による浄め

塩は「たたり」や「さわり」の除去や、危険の防止に効験があるとされ、多用される。自分でしようが、他人がしようが同じ効果をもつ。

③ タブー

辰昇は四足動物の肉を食べない。

日柄、吉凶、方位などを暦を用いて指導する。

三月荒神をさける。幼少の頃母に教わった。

3) 信徒組織

東大寺布哇別格本山は、華嚴宗唯一の海外寺院であるが、開山上人平井辰昇の私的寺院という色彩がきわめて強い。平井辰昇という個性豊かな宗教家の霊能力（法力）が、名実ともに寺院の基礎となっているからである。他の寺院と異なり、理事会は名目的に存在するだけで、発言権をもたない。信徒総会も無論名目的にしか存在せず、合議のうでで寺院経営がなされているわけではない。

東大寺は、平井辰昇と信徒の個人的関係を基礎におくにもかかわらず、行事や奉仕活動を通じて信徒間にもそれなりの絆が認められる。

まず各種の宗教的行事について見てみよう。日課については少し前に述べたので、毎月の行事および年中行事について列記したい。

a) 月次行事

10日 大法要。

15日 護摩法要。

21日 弘法大師縁日。百万遍法要。

28日 不動尊縁日。

(いずれも 8:30 AM より)

b) 年中行事

12月31日 除夜式。30秒毎に108の鐘を鳴らす。

1月1日 元旦式。「君が代」「1月1日」などを戦前のテンポで斉唱。

2月第1日曜 星祭。節分は星祭と重なった時のみ執行。

3月18～24日 春の彼岸。

4月第1日曜 花祭。甘茶の接待²⁰⁾。

5月第1日曜 聖武祭。二月堂の過去帳をよみあげ、21巻心経をあげる。(聖武天皇の命日の追善供養。)

7月13～16日 盆法要。16日は施餓鬼供養のあと精霊流し。

9月20～26日 秋の彼岸。

10月第1日曜 聖武祭。5月と同じ。(大仏造頭の聖願の記念。)

年中行事、月次行事にも増して信徒間の連帯感を強めてきた契機は、寺院建立以来の奉仕活動である。その行為には、救済に対する報恩感謝の意味が込められている。子供の頃から人のいやがる掃除が好きだったという辰昇は、寺院全体をいつもきれいにしておかないと気がすまない。信徒も法要後、空拭き掃除に精を出し、休日には庭園の手入れをする。仏像・仏具も2週間に1度磨いている。

それから信者同志の親交には、奉信会の果す役割も大きかったと推定される。これは本堂建立当時から1976年11月まで、20年近くも続いた。毎週土曜日に、当番家族が、先祖供養の後、奉信会のメンバー約50家族を本堂において接待したのである。しかし寺の行事が多すぎるという理由で、先年辰昇の方から断るに至った。

なお、平井辰昇は信徒を接待することが多い。恒例になっているのは、春の聖武祭のあと、建立時の功労者を接待する。接待は母の勧めの一つでもあり、「人にあげるのが私の道楽」とまでいう。

これに対し、信者側は辰昇の誕生日を祝ってホノルルのホテルでパーティを開くのを恒例としている。

東大寺は信徒3万人、オアフ島に1万5千人というが、常時出入りする信徒は300名前後と推定され、比較的固定化している。新しい信者は毎年増えてはいるものの、1950年代の寺院建立時のメンバーが中核となっていることは否めない。

白人を布教の対象外とし、日本語を中心とした教化活動が、今後どこまで維持でき

20) この甘茶を冷蔵庫に入れ、月1回取り出しては暖め、再び冷蔵庫に納めておけば、1年はもつという。信者の息子が肘を怪我し、2日半、血が止らなかったのを、甘茶を飲ませ念仏を唱えたら、不思議にも血が止ったという。

るかは、問題の多いところであろう。アメリカへの同化を志向した他宗とは逆に、日本的価値を最優先させた東大寺のいき方が、戦後の一時代を画したことは無視できない。後継者問題も含め、今後の動向が注目される。

4. 沢田花祥と天真道

天真道の信仰は、太平洋戦争の直前、東貢によってはじめてハワイにもたらされ、戦後もしばらく東を中心に信仰集団が形成されていた。1951年、その東の名代として信者の沢田花祥が日本の本部を訪れた。そして沢田は本部での10日間の修行を通して霊能を獲得するに至った。ハワイの氏神をはじめ神々の「お告げ」が下ったのである。靈感を得て帰布した沢田は、さっそくラナイ島で布教を開始した。東はのちに教団を離れたので、今度は沢田を中心に天真道の信仰が広まることになった。1954年、神の「お告げ」により沢田はホノルルに転出し、舞台はラナイ島からオアフ島に移った。

ところで沢田花祥（本名：花代）は山口県出身の父と広島県出身の母との間に生まれた二世である。出生地はオアフ島ワイパフ、1979年現在73才である。ハワイで高等学校2年まで在学し、16才の時、蓄膿症を治すために親の故郷である山口県の周防大島に行った。そこで後にイトコと結婚したが、性格の不一致や夫の浮気などのために離婚、子供を残してハワイに戻った。そしてハワイでも再婚を重ね、結局三人の姑に仕えるという人生を歩んだ。こうした人生体験が信仰の一因ともなっており、霊能者としての沢田にはプラスに作用している。彼女は「苦勞させてもらったのが修行で、とくに苦行をしなくてもよい」と苦しかった半生を宗教的に正当化している。

本部から戻って神がかりをするようになった花祥を、夫はホノルルの病院に強制的に入院させた。花祥の霊能力も夫には狂気と映じたのである。その頃、彼は大工監督をしていたが、1954年、彼もホノルルに引き揚げるようにとの「お告げ」が花祥に下った。彼は「35年もラナイにいて、ホノルルでのたれ死にするのか」と反対したが、医者への勧めもあって、結局1954年6月30日ホノルルのカリヒに転出した。その後ホノルル内を点々と移り住み、1971年ポンチボウル丘陵西麓の現在地に居を構え、礼拝所を付設した²¹⁾。なお1966年8月26日、天真道教団本部より許可を得た後、外国系非営利団体としてハワイ州の認可を受けた。爾来、天真道ハワイ教団を公称している。

沢田花祥の霊能力の特徴は、天真道の主祭神（天真大神、三蔵稻荷）²²⁾以外の神々

21) 1971年、教団が沢田のために土地と3軒の家を購入し、そのうち1軒を住居および布教所に充当し、他の2軒は貸家として収入を得ている [井上 1979: 68]。

22) 三蔵稻荷は倉稲魂神（ウカノミタマノカミ）と岐之神（クナドノカミ）であり、前者は衣食住を司る五穀（いづくさ）の元祖（みおや）として、後者は往来を守る神として崇められている。天真大神は天地主宰の神、親神と考えられている。

によく感応することである。沢田を霊能者の一人として本稿でとりあげる理由も、実はここにある。これらの神々は親神である天真大神の「協力者」として捉えられており、「親神は一つだからどの宗派に属していてもよい」という信念と共通の根をもっている。もっとも霊には高低の位階があると考えられてはいる。

最初沢田が本部で靈感を受けた際、ハワイの氏神が下ったことを先に記した。その後ハワイの氏神が下る場合には、左の掌に右の拳が激しく上下にぶつかり、ちょうどハワイ原住民の主食ポイをつくるためにタロイモを搗いているような動作が出てくる。ここには、ハワイの氏神は氏子たる住民を助けてくれるという信仰が認められる。

日本の神々もよく憑依するが、いずれも沢田になじみの深い神であることが特徴となっている。たとえば首から上の病によくきく周防大島大友神社の神。大友神社は大島町にある小祠で、娘時代よく参拝した神社である。大島再訪の機に大友神社へ久しぶりに参拝したところ「ようまいってくれた」との「お告げ」があり、感涙にむせたという。このほか婦人病なら和歌山県の淡島神社の神、勉学のことなら天神（菅原道真）というように、それぞれの機能神が下るのである。また氏神観念に近い神としては、広島県人の場合は厳島神社の神、熊本県人の場合は加藤神社の神、大分県人の場合は宇佐八幡宮の神、沖縄県人の場合には波之上宮や普天間宮の神などが降臨する。これらの神の判別は、取り次いだ言葉のみならず、手の動きによっても明らかとなる。たとえばハワイの氏神は先述の通りであるが、厳島神社の神は両手を合わせて拝む形をとり、宇佐八幡宮の神は親指と人指し指で円形をとるといった具合である。なお東京の浅草寺に参拝した時には観世音菩薩から「天真道はよい宗教である。しっかりやれよ」との声がかかり、長野の善光寺でも阿弥陀如来から同様の言葉があったという。また沢田花祥の両親は本派本願寺の門徒だったが、ある時親鸞から「親様に変りはない」との言葉が花祥にあり、安心して天真道の信仰に打ちこむようになったという。

沢田花祥は死者、とりわけ先祖の霊にも感応する。信者の伺いに対し、先祖の意志を取り次ぐ役割は、たいへん重要な活動の一つとなっている。沢田花祥自身の場合にも、死霊との対話は重要な意味をもっている。彼女は1977年8月に夫を亡くしたが、わからない事がある時など **Daddy, Daddy** と呼びかけると今でも生前と同じ言葉で返事が返ってくるという。なお先祖祭祀は天真道の重要な宗教活動でもあり、本部に先祖を奉祭すると特に守護があらたかだといわれている。

天真大神、三蔵稻荷をはじめとするこれらの神仏や死霊が、沢田の霊能力を支えている。その霊能力は、大別すると霊医術と取次からなっている。霊医術は霊動療法ともいわれ、人の手を借りて霊力を伝える方法であり、悪い所に自然と手が動いていく

という。教団本部発行の『天真道神嘉言』には「人は神の分量にして玄妙なる靈能を有し、そが病を癒し人の病をも治し得るの力あり」と書かれており、靈醫術を授けられれば誰でも靈能を発揮できるのである。ある時、手足のなえた子供を母親が連れてきた。沢田花祥の手は靈動により子供の首の部分に行き、母親にも靈醫術を授けて首に手を当てさせたところ、数回で治ってしまったという。なお靈醫術は使えば使うほど靈氣がでるが、使わなければ宝の持ち腐れになってしまうとのことである。

次に取次であるが、先程記した神仏や死靈の神示を参問者に伝えるという方法をとっている。参問者の持ち込む問題は、病氣、身体不調、家庭問題、売買問題、等々、多岐にわたる。沢田花祥自身も最初は自己の靈能力を信じられず自信もなかったが、次第に当るようになって自信を深めていったという。1976年頃までは朝から晩まで1日中「お伺い」に従事していたが、齡とともに疲労が激しくなり、午前10時と午後7時の2回に限定した。ところで「お告げ」には言葉の問題がかかわってくる。中年より上、つまり二世位までは日本語が通じるけれども、それ以下は英語の通訳が必要であり、天真道の信者（「道人」という）が沢田の日本語を必要に応じて通訳している。道人の何人かは先祖の言葉を聞く能力をもち、英語の「お告げ」を受ける場合もある。副会長のYは二世の女性であり、日英両語に堪能で若い世代にも対応でき、沢田のよき協力者となっている。このYが神の「お告げ」によって沢田の後継者と決定した。神の「お告げ」はある意味で絶対である。というのも、Yが教団の教師免状を持っていない段階で「お告げ」により後継者と決定したからである。

沢田花祥の靈能力に加えて、「お知加良石^{ちかろ}」の存在にも注目する必要がある。沢田所有のものは教団本部の「お知加良石」とは別物である。沢田が信者を5人連れて本部で修行していた時、「お知加良石を授けてつかわす」との「お告げ」があった。修行を終えた沢田は、伊勢神宮の内宮を参拝した。天真道で母神として祀る天照大神が内宮には奉祭されているからである。さて伊勢神宮の五十鈴川にはきれいな石があった。けれども、残念ながら「お告げ」がなかった。しかしある社で祝詞をあげたところ、「ここでひろわれい」との言葉がかかった。そこで、ぐるりと回って竹垣の下から中に入り、「これ」と言って小石を拾い上げた。それは蓬色のきれいな石であった。それをハワイに持ち帰り「お知加良石」として祀っている。目をつぶったままこの石をもって患部を撫でたり「おさずけ」をしたりすると、靈驗があらたかだそうである。なお年1回秋季大祭の時、この石の靈力を信者自らに受けとらせる行事(修行)が行われる。

最後にメンバーと行事について簡単に記しておく。現在、年会費を納める信者は約100名、中年の女性が大多数を占めている。主な年中行事は 春秋の大祭（4月・10

月)、盆の供養祭(7月)であり、第2日曜日が当てられる。それ以外の月の第2日曜日は月次祭となっている。年頭には信者の親睦をはかる新年会も催されている。

5. 松岡順澄とカパラマ不動教会²³⁾

山口県玖珂郡和木町出身の松岡順澄は、1953年6月13日、ハワイに住む二世の夫のもとに3人の子供を伴って来布した。順澄46才の時である。夫は戦時中日本で兵役を勤め、戦後まもなくハワイに戻り、日本との往復生活をする間に順澄と結婚し、子供をもうけたのである。

順澄の不動信仰との係わりは1949年にさかのぼる。順澄が42才の時、生後7カ月の子供が高熱のため死にそうになり、近所の主婦の紹介で朝鮮引揚者の前田妙順を訪れた。順澄が彼女の指導に従って一心に懺悔と祈願を不動明王に捧げたところ、子供がキッと大声をあげ、汗をびっしょりかいて助かった。それ以来、広島県大竹に住む前田妙順のところに通い、吉野の金峯山にも参詣して、不動明王の熱心な信者となったのである。

ハワイ渡航後、松岡順澄はホノルル市カリヒのアフヌイ街の借家に住んだ。そこは当時多くの日系人が居住していた地域の一つであった。そして1955年頃から、広島で開眼してもらった不動明王像を自宅に祀るようになった。というのは来布当初、同信の輩を求めたが見つからず、結局自ら奉祭する決意を固めたのである。その決意に至るまでには、不安や迷いが交錯し、逡巡の日々を重ねていた。ある時は、道を歩いている最中に不動明王から「お前の体や手を使って教えてやる」と声がかかり、また別の時には、不動明王を祀る祭壇の上方から「やれんことはない。やれ」と男の声が聞えたという。このような体験を通して自立を決意するに至ったのである。1958年には、金峯山で1週間位の講習を受けて得度し、1966年にはハワイの信者を連れて金峯山に参詣している。なお1962年3月24日、啓示によりアフヌイからカパラマに移転した。今でも自宅の一部を堂に当てている。

松岡順澄の霊能力は、按手加持と啓示が主体となっている。体に手を当てて押したり揉んだりする按手法は、しばしばマッサージと誤解されるので、「お祓い」と称している²⁴⁾。松岡によると、自己の意志に反して未知のツボに自然と手が動いていくという。信者によると、順澄の手はある時は熱く、ある時は冷たく感じられ、そこから

23) カパラマ不動教会は、カパラマ不動講とも称する。英文の Bylaws には *Kapalama Fudo Ko* とのっているが、日本文の『カパラマ不動教会規則』にもとづき、教会とした。なお金峯山修験本宗本山からハワイ別院蔵王寺の名称ももらっている。しかし、それを公称する段階には至っていない。

24) 家や車の「お祓い」も行っている。



写真5 カバラマ不動教会の祭壇

一種の靈波が出ると彼らは信じている。また「お祓い」によって体が軽くなると主張する信者もいる。もちろん痛みの除去・治癒が手の力に帰せられることは言うまでもない。「お祓い」の最後に、松岡は体に直接九字をきる。この加持によって治った病気の種類は多種多様であろうが、筆者は癌、高血圧、半身不随等が快癒した体験談を信者より聞いた。なお「お祓い」には憑きもの落しの場合も、車や家の「お祓い」の場合もある。松岡は自宅や病院においてこの「お祓い」を行うが、例外を除きアポイントメント制はとっていない。

啓示は「お知らせ」と称し、神の言葉を直接聞いたり、ある兆しをサインとみなすことによって成立する。先述の召命体験や、日柄・結婚・離婚・病気・移転・ビジネス等の相談に対する答が前者に属する。また神からの一方的な突然の「お知らせ」もある。たとえば天理教や大本教の「お筆先」を想起させる書付けが、「お知らせ」として、調査当時、告知板に掲示されていた²⁵⁾。後者の例には、目前にちらついた白い空の兆しを水子の靈の知らせと受けとり、水子地藏尊を祀るようになった例がある [中牧 1980: 103-104]。

カバラマ不動教会の崇拜対象は、堂内の不動明王・脳天大神・御巳様と、堂外の水子地藏である。言うまでもなく不動明王が本尊であり、金峯山蔵王堂の本尊と合致している。脳天大神は吉野山龍王院の祭神である。御巳様というのは、6尺ほどの蛇の

25) 「かみからいただいたことば」として次のように記されていた。「からい、からいと、このひとみれば、からい、からいも、なほからい、からい、からいと、おもわでいけば、すへは、この人ほとけさま」

ぬけがらが正体であり、吉野の本山から授与されたものである。当初、順澄はそのぬけがらをそのまま信者に見せていたところ、頭がしびれるようになり、ついに「私は見せ物ではないから見せるな」との「お告げ」がくだり、それ以来瓶に詰め社に納めて祀るようになった。蔵王権現の化身とされている。なお御巳信仰は関西に根強い蛇信仰を母胎としている。蛙の置物も飾ってあるが、蔵王権現との深い関係にもかかわらず、祭祀の対象とはなっていない。水子地藏像の開眼法要は、1978年2月に金峯山修験本宗管長を招いて執行された。

これらの崇拝対象にかかわる縁日は次の通りである。不動明王の縁日は本来28日であるが、カハラマ不動教会では月の最終日曜日を本尊の感謝祭と称し、それに当てている。法要後昼食を共にし、講員間の親睦をはかっている。脳天大神の感謝祭は19日、水子地藏祭は24日を縁日とし、昼夜2回の法要がある。

崇拝対象の分霊・分身としての意味をもつ御札や御守は、本山のものが用いられている。とくに脳天大神の御祈禱札は、不動明王の絵姿と共に、在家本尊として、寝室などに祀られているようである。脳天大神には、蛇型の指輪御守もある。脳天大神はとくに学問の向上に効験があるとされている。

ところで現世的問題の解決には、松岡順澄の霊能力、崇拝対象の霊験とともに、信者自身の心の問題が大きく関与してくる。松岡は「修験宗は心を磨く宗派である」と断言する。また病気が治るのも治らないのも心次第であると信者に教えている。信仰して神経を使わなければ病気になるのは当然だとも主張する。要するに、心の問題が解決されれば、肉体の疾患も回復するという立場である。それはほとんどが松岡のいう「心の納め方」に係わっている。ある宗教団体（生長の家？）の信者がもってきた次のような紙を堂内に貼らせたのも、「心の納め方」と一脈通じあうからにはほかならない。そこでは気の字を長く書いて「気は長く」とルビをふり、心の字を丸く書いて「心はまるく」と読ませる。また腹の字を横に書いて「腹はたてるな」、口の字を小さく書いて「口はつつしめ」と読ませ、そして命の字を長くのばして「命は長らえる」と結んでいる。

カハラマ不動教会のメンバーは病気平癒などの現世利益を受けてきた人たちによって構成される。葬式を契機としたメンバーではない。葬式・法事は先祖を祀る寺院に託すのが普通である。信者の大半は口づてで集ってきた。宣伝といっても日本語新聞の新年特別号に謹賀新年の広告を出した程度であった。ブームもなければ、他宗からの激しい非難攻撃もなかった。にもかかわらず今では300人近いメンバーをかかえている。その多くは日系二世であり、キリスト教徒や他島在住者も少なからず含まれて

いる。性別では相対的に女性が優勢である。非日系人の信者も少し存在するが、利益を受けても長くメンバーとして留まらない者が多いらしい。最近に至るまで組織はきわめてルーズであった。それは松岡順澄自身が他人への負担をいさぎよしとせず、また有能な組織者の協力も得られなかったからであろう。しかし1979年7月に至り、「カパラマ不動教会細則」が作成され、組織面での充実がはかられた。それは、これに先立って、本山からハワイ別院公称の許可がおりたことが、有力な契機となったと考えられる。この組織化にあたっては、新会長I等の尽力によるところが大きかった。Iは日系二世の真宗門徒であるが、半身不随を治してもらって以来、カパラマ不動教会のメンバーとなっていた。建築請負業を営む関係で法律面にも明るく、会社組織をモデルに教会の組織化に着手したのである。新しい組織は、会長 (President) のもとに役員 (Officers)、理事 (Directors) をおき、連絡委員会 (Corresponding Committee)、詮衡委員会 (Nominating Committee)、財務委員会 (Finance Committee)、細則修正委員会 (Bylaws Committee)、会員募集委員会 (Membership Committee)、社交委員会 (Public Relations Committee) 等の各種委員会を設置し、責任を明確化した。役員はほぼ全員が二世である。

カパラマ不動教会の得度者は、松岡順澄の他に10名内外いる。ほとんどが近年本山において得度式をあげた者である。なかにはMSのように金峯山の百日回峯行に参加したものもいる。これらの弟子筋の中からいずれは後継者が生れることと思われる。

6. 慈久ローズと高岩寺

慈久ローズは東京に生れ育った²⁶⁾。少女の頃、とげぬき地蔵で有名な巣鴨の高岩寺(曹洞宗)によく参詣していたが、そこのある僧から、結婚後遠い国へ行って幸福な生活を送り、いつかは多くの人の世話をするようになると言われた。その時はさして気にもとめなかったようだが、彼女の人生はその‘予言’に近いものとなった。彼女は1953年に進駐軍勤務のレスター・ローズと結婚、1957年アメリカ本土に渡り、全米41州を点々と移動した後、1963年ハワイに来住した。夫は土地ブローカーを業とし、彼女は洋品店を営んだ。彼女は洋品店のかたわらパートタイムのカウンセラーを勤めたこともあり、主に結婚問題などの相談にのっていた。1973年、当時ハワイ進出をめざしていた天台宗の高僧を知り、その紹介により比叡山で得度し、名を慈久と改めた。2カ月の修業を終えて帰布した後、ホノルル市西部の自宅で地蔵信仰主体の宗教活動

26) 慈久ローズの生いたちに関しては、主として小冊子『天台宗高岩寺 (Tendai Shu Koganji Togenuki Jizo-son)』(1974年刊?) によった。この小冊子は英文で書かれ、編者がローズおよび信者の話をまとめ、最後に生年の12支による占いを載せたものである。

を開始した。通称地藏院、正式にはとげぬき地藏にちなんで高岩寺を名のり、天台宗ハワイ別院の傘下にある。本尊は、巢鴨とげぬき地藏尊の御正体を入れた延命地藏菩薩像である。子供のいないローズ夫妻は、遺産を残すよりも寺の建立を、と志し、ホノルル市マノアに2,500坪の土地を購入して、1979年から建築工事に着手した。

子供の頃から宗教が好きだったという慈久ローズは、友人を自宅に集めては精神的苦悩等の相談にのっているうちに、発心して僧侶になるという過程をたどった。慈久の宗教活動の一大特徴は、地藏のメッセージを伝える「お知らせ」にある。この「お知らせ」は靈感と深く結びついている。ふつう「お知らせ」は地藏に向かって読経する間にくだり、自然に口が動くという。この「お知らせ」による体験談の例をいくつか紹介しよう。

例1 信者の娘が慈久を訪ね、腹痛を訴えた。医者は左に腫瘍があると言ったが、慈久は「お知らせ」により右にあると主張した。後にその医者から慈久に電話がかかり、右にあったことを告げてきた²⁷⁾。

例2 夫を殺そうとしてナイフを握ったこともある婦人が、娘に勧められてローズ宅を訪ねた。慈久は、家のガレージを直した時に、動かすべきでなかったものを動かしたか、砕くべきでなかった石を砕いてしまった事によって問題が生じたと言った。そこで慈久は家のお祓いを行った。それ以来婦人はローズ宅の集會に通うようになり、そのうち家庭問題の処し方にも目が開け、ついには一家全体が通うようになった。その婦人の頭痛も、地藏に向かって祈るとすぐ消えるようになった [高岩寺 1974?: 12-13]。

例3 11才の少女の髪が1日3,000本の割合で突然抜け始めた。医者は、カツラの着用か、副作用の強い薬物服用かの二者択一を迫った。そこで母親が慈久に相談したところ、両方とも不用であり、間もなく止むとの予言だった。すると実際に少女の抜け毛は止み、髪も元に戻った。 [高岩寺 1974?: 16-18]

この他にも信者のいろいろな体験談が、小冊子『高岩寺』に収められている。それらを検討すると、相談の内容は病気、仕事、学業、訴訟など個人的な性格が強く、その原因は心配や不安はもちろん、聖なるものの冒瀆、先祖の罪などに帰せられている。それらの問題に対し、慈久は「お知らせ」、予言、助言、透視、祓い、占い、瞑想などによって解決を与えようとしている。とくに私情を交えず、単刀直入かつ明快に地藏の「お知らせ」を取り次ぐことが、信者に結果的にはうけている。また数珠で叩いて罰したり、とげぬき地藏の紙をのませたりもする。

慈久ローズは週日の大半を自宅での宗教活動に当てている。特に外部宣伝はせず、

27) 慈久ローズ談。

信者及びその家族・友人のみを予約制で受け入れている。信者が電話で相談してくることも多い。相談は一对一の場合に限らず、家族や友人等関係者同伴の場合もある。しかし基本的には慈久との個人的な体験が、地藏信仰で重きをなしているようである。

月3回の4の日の縁日には、信者が数多く集う。また週1回の仏教クラスもある。しかし信者間の交流は、とりわけ寺院建立の共同作業を通じて深まっているようである。小冊子の編者が述べているように、高岩寺は確固とした組織というよりもまだ‘一大家族’といった性格が強いようである [高岩寺 1974?: 6]。

1977年現在、信者は約300人で、日本語を理解する人はその1割にも満たないという。英語を常用する日系の‘英語族’が大半を占めるが、白人、フィリピン人、朝鮮人などの非日系人も少なくない。慈久の堪能な英語力により、地藏信仰が英語を日常語とする人々に多く受容されている点が、特に注目される。性別では女性が多い。もちろん宗派的背景にはこだわらない。

7. 林生道と信貴山御分霊所

林生道は東京中野に生れ、5才の時、奈良の尼寺（禅宗）に預けられた。幼少の頃から靈感が鋭かったという。13才の時、得度し、生きる道を伝えるという意味の生道を名のるようになった。曹洞宗の宗門大学である鶴見大学で薬学を専攻し、仏教一般を併せ学んだ。1956年、白人と結婚してハワイに来住した。夫妻に実子はないが、養子を2人育てている。

林は鋭い靈感と仏道修行の経験を生かして、1974年頃から数名の信者と共に独自の宗教活動を開始した。最初の信者には世界救世教の元信者が多かった。当初は本尊もなく、ただ悩む人を私的に救済していたが、やがて本尊を祀って正規の宗教活動を開始すべきであるとの自覚に達し、1976年6月16日、信貴山真言宗の毘沙門天を自宅に奉祭するに至った。林と信貴山真言宗との関係は、後者の管長鈴木鳳永と幼なじみだったことが契機となっている。鈴木鳳永管長は自ら毘沙門天を携えて来布、マカキロの林宅にそれを安置した。

林生道は信貴山の加持祈禱允許状を有するが、林の霊能者としての側面にも注目する必要がある。たとえば霊が落ちるのは、林生道が自己の体内に霊をひくためだとされている。汗をかくのは霊をひいた印しであり、霊をひいた後は生道自身の体を塩で浄めなくてはならない。この逆に、霊を追放する方法も常用される。林が手に持った大般若経を参問者の体に当てると、手は自然と悪い部分に向い、大般若経で体を叩くと霊が出て行くとされている。この毘沙門天の加護による「お祓い」の結果、病気も

狂気もすべて即座に治ると主張されている。林は霊をひいたり追放したりするだけでなく、靈感にも敏感に感応し、事故の予知や透視に鋭い能力を発揮している。ただし伝達に当っては、卒直に「お告げ」を伝える場合もあれば、病気ではないなどと方便を用いる場合もある。

信貴山御分霊所の本尊は毘沙門天であるが、その両脇には融通尊と観音が併せて奉祭されている。融通尊は信貴山の祭神の一つであるが、虹色の細い光がシュッシュと音をたてて飛ぶという。月次祭の時にのみ開帳される。世界救世教の「おひかり」信仰と一脈通じる点が、とくに注目される。他方、観音は先祖と同一視されており²⁸⁾、先祖祭祀こそ信貴山と世界救世教と異なる点だと主張する元救世教信者もいる。なお分霊の類として、信貴山成福院の御札・御守のほか、毘沙門天のペンダントが使用されている²⁹⁾。

このように信貴山御分霊所の宗教活動の中核には、林生道の霊能力と毘沙門天・融通尊・観音の加護に対する信仰が存在する。それにもとづき、以下のような儀礼行動が行われている。

月次祭は毘沙門天の縁日である3日の夕刻に行われる。信徒和歌から始まり、加陀、開経偈、十善戒、発菩提心、真言などが続き、般若心経を誦経し、七福神御詠歌などを斉唱する。その間に林が先祖供養を行い、最後に毘沙門天の真言を唱えて終了する。所要時間は30分。そのあと説教とアナウンスメントがある。特筆すべきは、林生道自作の御詠歌である。林は禅寺での経験をもとに御詠歌を作詞作曲し、毎週金曜日に信徒に練習させている。御詠歌には、毘沙門天ら七福神の霊験を讃える七福神御詠歌を始め、懺悔御詠歌、地蔵菩薩御和讃、信徒和歌、親子御和讃、さらに結婚和讃、彼岸会御和讃などがある。他宗のように鈴や鉦を用いないのも、特徴といえば特徴である。その内容は神仏の霊験や信徒のあり方などをやさしく説いたものである。なお説教は林生道や幹部によってなされるが、林の場合はあらかじめカタカナで原稿を作成し、英訳してもらっている。説教は、月次祭や年中行事の他に火曜日の座禅会、金曜日の御詠歌練習の後でもしばしば行われる。年中行事としては、2月の節分、3月の彼岸、4月の花供養、7月の盂蘭盆法要、7月3日の毘沙門天王出現記念大祭、8月のポンチボウル慰霊祭、9月の彼岸などが、主なものとしてあげられる。

信徒は、最初数人で始まったが、本尊安置の頃には50人位に増え、1979年の調査時点では250名を越えていた。日系人が大部分を占め、若干名の外人信者も存在するが、

28) 観音は仏のカテゴリーに入るから、先祖のホトケと同一視されるのであろうか。

29) これを首にかけていると、いざという時に毘沙門天が介入してくれると信じている。なお、世界救世教信者が首にかけるペンダント風の御守と形態的に類似している。

正式メンバーにはなっていない。エワ周辺地域が6割位というが、ホノルルから来る信者もいる。複数の宗派帰属を前提としているが、林生道は結婚式、葬式の免状をもっており、結婚式の司式、葬式の助勤を行ってきている。信徒組織の面では、理事会の活動も活発に行われている。林生道のオジにあたる TM が、設立以来理事長の役職にある。理事長のもとに12人の理事がおり、毎月1回理事会を開いている。

ハワイ信貴山御分霊所は信貴山成福院の系統であり、アイエアに1支部を有している。林の自宅を改造して宗教施設とし、名称もまだ御分霊所でありながら、上記の如き宗教活動と組織に対する自負とから、社会的に公認されたチャーチという意識が強く認められる。

調査時はちょうど増築工事中でもあり、活気に満ちていた。また林生道の補佐役として、青年僧の来布も予定されていた。

8. 島福カメ

島福カメは1901年沖繩に生れ、19才の時ハワイに渡った [井上 1979: 70]。生家は中頭郡美里村比屋根（現沖繩市）の貧乏な農家だった。しかし母も祖母もノロ役をつとめ、カメは幼い頃よく母の伴をして字の御嶽に参拝していた。父はカメが12才の時に死亡し、母も1935年に亡くなった。

1) 成巫過程

島福カメの成巫過程を主として彼女の著書『天寶』によって追ってみよう [島福 1968]。カメの最初の宗教体験は1943年に起った。8年前に死亡した母が三晩続けて信仰を迫ったのである。

「初めは1943年10月10日の晩より三晩同じ様に十二時におこされ、母上様の霊が束の線香を私に取りなさい、信仰しなさい、と申されました。夢ではなく、私はおきてすわっております。母上は1935年に他界なさって居られるのに、どうしてこんなにと思ひ³⁰⁾」 [島福 1968: 1] 友人に相談したところ、祖母も母も神の使いだったのでその後継者になるかもしれないからと信仰を勧められ、以来観音を拝むようになった。

最初の神がかり（神ダーリ）は1945年2月11日の紀元節から4月1日にかけておこった。その直前、仕事に行っても、パイナップルを切るナイフを持つ手がふるえて働けず、一時間位で帰されていた。この49日の間、水と果物だけで生きのびたというが、その間の体験が、霊能者島福カメにとっては決定的な意味をもっている。

30) 『天寶』では随所に句点を用い、読点はほとんど使っていない。本稿の句読点は筆者による。以下同様。

「ある朝生まれかわるためにとても苦しみ、学校より子供をよびもどして、おかあさんは今神様よりゆるされて神様のおそばへ行く事が出来ましたから、皆よい子になってくれと、別れをしたそうでございます。＜中略＞其の晩神様が私の体を作りかへて下さいました。髪の毛ぐらい小さい電気のような物で、初め左の親指より人さしゆびと、ずんずん左の方全部作^つられ、次に右の方を同じ様に作^つられました」〔島福 1968: 3〕。

この生れかわりの体験は、翌年の3月3日に、ちょうど一年前の同日に起ったことを神より知らされる。

「ある朝とてもさむく、おきて居る事が出来ません。ねて居りますと私のはらが大きく、今日明日子を産む様な体と思わされ、生む仕度（と）言ひましても、ただ心だけに思わされるのです。しますと女の子が生れた、女の子が生れた、と神様が大喜びになられました。＜中略＞あなたはまる1年間もあの日をたずねたずねたねー。去年の今日でしたと、3月3日と教へて下さいました」〔島福 1968: 12-13〕。象徴的な追体験である。

生れかわりの体験について天の宝を見せられる。それは2個のきれいな丸い宝物であった。

「ある日天に二つの光を見せられ、此の宝物を取る事が出来るか知らん、もし取る事が出来なければ、此のままになって行くかねー、と神様が申されました。此の意味は世の初め天に男女二人の神様が居られます事を、私に見せておしへて下さいました。この宝物とは天の二人の神様の事でございます」〔島福 1968: 4〕。

天の宝とは男神と女神を表わし、父なる神以外に母なる神がいることを教えている。しかも神は光であって物質ではない。ちなみに1948年の啓示に「みんな神は一人と言われますが神は二人です。父だけでなく、母も居られます。一人では何事も思う様には出来ません」〔島福 1968: 19〕とある。

ついで観音とイエスにめぐりあう体験をする。1943年以来拜んできた観音は、男神とイエスとの出会いの導き手として了解させられる。

「ある朝冷水浴して来なさいと神様より申されますので、言われる通り致しますと、何かさわさわするのを手にさわられ、これは観音様です、此の観音様のおかげで私は神の前に手道^て引してやったのよ、と申されました」〔島福 1968: 5〕。

つぎに白衣のイエスに出会う。

「左へ向っても右へ向ってもイエス様が白の着物をつけて立って居られます。私に神を拝みなさいと申されます。どこへ行っても拝みますかとたずねますと、此の家で拜

みなさい、でも神様此の家はとても古く、雨ももりますと言ひますと、でも此の家で
 拝みなさいと同じお言葉です。では神様此の家で私に拝まさせて下さい、どうぞ世
 中の人々をお助け下さい、と私は御願ひ致しました。それより私の^{アツ}手をさし出され、
 白の巻物、ちょうど卒業^{アツ}状書見た様な物を私に下さいました。それから私の髪はむす
 んではいけません、いつもた^{アツ}らして拝みなさい、と髪をなでて下さいました」【島福
 1968: 5-6】。

イエスからの召命は、外へ出て布教することではなく、当時住んでいたモイリリ
 の家での人助けであることがわかる。白の巻物は、成巫の証書を象徴しているのであ
 ろうか。それからというもの、カメは毎日両手を見つめては髪ばかりさすり、黙して語
 らなかったという。神がかりの間、カメは水と果物だけで命をつなぎ、ずっと寝続け
 ていたのである。

こうして4月1日を迎え、49日ぶりに起き上った。皆と朝食を共にしていると、何
 千匹もの白い蝶が家に舞いこんできたという。これは天使達の祝福として解釈されて
 いる。この日はくしくもアメリカ軍が沖縄に上陸した日に当っており、以後カメは沖
 縄のために毎日祈り続ける。そんなある日、友人との談話中、戸口より光が入り、自
 ら普天宮と名のついたので、以来普天間宮として拝むようになった。ある時神から「琉
 球の国は今小さいが、今度は世界中の人がわかる様な大きなよい国にして見せてや
 る」との「お知らせ」が下り、同時にカメの名前が「天神子」である旨を知らされた
 【島福 1968: 11-12】。

島福カメの成巫過程は、体の再生、男女神・観音・イエスの顕現、召命、沖縄の神
 の顕現、命名と続いた。ここに沖縄県人に課せられた二重の適応——アメリカ社会と
 日系内地人社会への適応——の問題を宗教的・象徴的に読みとることも可能であろう
 【柳川 1977: 9】。

2) 天啓の教え

天啓を記した『天寶』は、1972年6月15日の朝、天啓によって「新しいばいふる」
 となる【島福 1972: 38】。それは本で読み、人に聞いたものではない、真の天啓と
 して提示されている。筆者の再確認に対しても、聖書を読んだこともなければ、キリ
 スト教教会に行ったこともなく、仏教寺院にすら足を踏み入れていないと答えた³¹⁾。

島福カメに下った天啓によると、パンテオンの構成は、父なる神と母なる神の二神、
 観音、イエス、普天間宮よりなっている。世界の間人は二神より生れ出た兄弟であり

31) とはいえ『天寶』の内容から推して、ノロであった母の言動、ハワイの日系キリスト教徒の
 言説などの影響を蒙っていることは否定できない。

[島福 1968: 25], 天神子たる島福カメが神仏と人との仲介的役割を果している。悪魔は1969年12月12日に死んだ [島福 1969: 37]。今やイエスと島福が世の救済者となった³²⁾。人間の世界は三界に分かれ、一界は母胎、二界は地上、三界は天界とされる [島福 1968: 13]。

神は天に在ると同時に心にも宿るとされ、^{まごころ}実心で拝めば願い必ず天に届くという [島福 1968: 21]。正しくは神だけを拝むのではなく、神仏様を拝まねばならない [島福 1968: 22]。この場合の仏とは、主として親・先祖を意味し、沖繩の宗教的特徴を反映している。そして^{まごころ}実心さえあれば金銭を必要としない点が強調される。したがって護符の類は否定される。

「ある人がこれ、私に神様持ってきたからいただきなさいと話されました。私は、いいえ、ようございますと返事をいたしますと、古い物は持って行くから新しいのとかへてあげますと言われました。けれど私は、いいえ、神様には古いとか新しいとか言ふては^{マフ}ありません、と私に言われました。ですから神を玩具見た様にして居ると、神様が御心配なされるのもむりはありません」 [島福 1968: 23-24]。また人間は働きさえすれば十分暮らしていけるので、神仏を売物にして金儲けをしてはいけないと戒めている [島福 1972: 39]。また神は光だからお守り札はいらない、とカメは主張する。

礼拝については、神仏に朝夕5分位ずつ^{まごころ}実心をこめて祈るべきことが記されている [島福 1968: 29]。本当の祈りは^{アークトウトウト}天御尊尊を三度実心から唱えることだという [島福 1972: 41]。そこには儀礼的要素が極端に切り捨てられている。しかも島福カメ自身の実践を、他人に強要していない点が特徴である。「人間は自由に暮しなさい」 [島福 1969: 10] との天啓のまま、参拝を勧めることすら禁止している [島福 1972: 39]。

3) 宗教活動

島福カメの日常的宗教活動は、自宅の一室における礼拝と取次にはほぼ限定される³³⁾。なぜなら啓示により対外的布教を禁じられているからである。

参問者はあらかじめ電話で予約をとり、島福宅を訪問する。まず紙に名前と年齢を記入する。島福カメはそれによって神を拝み、神についての話を聞かせる。相談内容

32) 「神様がイエス様の生れかわりで世の中を救ふ、世の中は何でも二つでなければなりませんと、申されました。〈中略〉ただ今はイエス様と私と二人で^{マフ}一しょになって、世を救ふために働かせて居られます」 [島福 1969: 33]。

33) 神のお告げの取次には、それにふさわしい場所があると考えている。どこでもよいというわけにはいかない。

は、病気、売買、遺失物、選択等々多様であるが、総じて、指輪や鍵の紛失の相談やら、どこのペンキ屋に依頼すべきかとか、身近な事柄が多いようである。商売にからむ選択の相談の場合には、時として外地に同行する場合すらある。

しかし島福カメが神に「お伺い」を立てない事柄が二つある。一つは盗難のこと。なぜならそれは人を互いに怨むことに通ずるからである。島福は、盗難は基本的には被害者に責任があると考えている。もう一つは株のこと。なぜならそれは博打と同一視されるからである。

島福カメは神の言葉を取次ぐけれども、加持祈禱による病気治しは行わない。しかし、どの医者に行くべきかを神に伺ったり、神仏を拝む道を教えたりする。他人に相談することによって気持ちは落ちつくものと心得ている。その結果として病気も治るのである。

当然のことながら、島福は相談内容を決して口外しない。そうした信頼関係の上に島福カメの宗教活動が成り立っている。それは島福カメと参問者の個人的な関係にとどまり、集団を志向しない。したがって、集會も開催しなければ、信徒組織も形成しない。ただ参問者は日系、とりわけ沖縄系の人が多い。非日系人の場合も多少あるようである。

9. 酒井 幸照

酒井幸照はハワイ島生れの二世の独身女性であり、1960年以来オアフ島エワに住んでいる。年齢は40才前後と推定される。父は熊本県の出身で、17才の時ハワイに渡航し、マウイ島で福岡県出身の母と結婚した。父は姫路の酒井侯の系統をひくといい、母は和気清磨呂の系統をひくとされる足立家から出ている。父は長男を連れて太平洋戦争直前に帰国し、二人とも戦時中に死亡した。

1) 神秘体験³⁴⁾

1966年、酒井は幼い姪にクリスマス・プレゼントとして ouija board³⁵⁾ (こっくりさん) を贈った。自らもそれで遊ぶうちに興がのり、別に自分用のものを購入し、友人と遊ぶようになった。

ある時、母の遺骨をハワイ島ヒロの寺院に納めるべきか、日本の墓に息子と並べて

34) 神秘体験については主として酒井幸照の自著に依拠し、インタビューによって補った。

35) ouija とは、フランス語とドイツ語の肯定語 Oui と Ja の合成語である。ouija talking board ともいい、板の上にアルファベット26文字、Yes, No, Good Bye, 数字、などが記されている。message indicator に軽く手を添え、質問を発すると、自然に indicator が動き、メッセージを伝えてくる。ふつう二人で遊ぶが、酒井は一人できるようになり、左手で indicator をさわり、右手に鉛筆をもってメッセージを記した。

納めるべきかを、ouija board に伺ったところ、「夫、淡島守のそばに眠りたい」と日本語で答が返ってきた。それに味をしめて亡父や亡兄の霊を呼びだした後、母方の先祖との交信を試したところ、次のようなメッセージが ouija board に綴られた [SAKAI 1972: 17]³⁶⁾。

スエコサマ

エワ ニ コノ ヨ ラ スゴシテ オラレ マス ネ。トノ-サマ ワ ソナタガ ササ
ゲタ オクリモノ ヲ トテモ ウレシク オモッテ オラレ マス。トノ-サマ ト ゴイ
ッショ ニ オット トシタ オカアサマニ オット ヲ サガシテ クダサイ マセ。ト
ノ-サマ セッショ ノ オネガイ デス

ワケ キヨマロ

この贈物とは、和氣清磨呂の創立と伝えられる福岡の満願寺に母の代行として送付した志納金ではないかと思ひ当った。伝承では、和氣清磨呂は九州に流された時、足の血管を切られたにもかかわらず恢復したので、足立と改名したという。

次に父方の先祖との交信を望んだところ、織田信長からのメッセージが綴られた [SAKAI 1972: 18]。

スエコ サマ

ソナタ モ アスニ ナッテ ハ オクレ マスゾ。タイギ デモ エト ノ シモノセ
キ ニ オラレル オヒト ト ツツイデ タモレ。ツツイデ ナキ ハハ ト オトウサ
マ ヲ シアワセ ニ シテ クダサレ。サシ ムカイ ナレド ソナタ ノ シアワセ
ノ タマモノ ヲ サズケ マス。レキシ ニ ノコル ハ ソナタ ノ ウレイ モノ。
シッテオル ノハ ノコス アイキドー ノ センセイ。ソシテ ソノホー レキシ アン
サツ モ トテモ ノレ ニクク アンサツ ヲ シナイ ホウガ ヨキ ニ オモイ マス。
ソレハ オトノ-サマ ノ オモイ デスガ、ゴメン ネ、スエコ サマ。

オダ ノブナガ

酒井幸照は、この頃、よき結婚相手に恵まれず、人知れず悩んでいた時期であつた³⁷⁾。織田信長は、彼の養子が姫路の酒井侯の娘と結婚したと ouija board を通じて

36) ouija board に現われた言語は、最初不明だったが、やがて古い日本語であることがわかった。酒井は子供時代には日本語学校に通い、親と一諸に好きな日本映画や浄瑠璃などの芝居をよく見に行っていたという。また少女時代に桜演劇団という劇団に加わり、日本劇を上演したことがあり、日本の古典にも多少ふれていた。酒井自身は「メッセージは下意識や想像の断片ではない」 [SAKAI 1972: 42] と主張するが、このように見事な日本語が綴られたこと自体、奇跡でないとするれば、遠因として上記のような点が考えられる。日本で2年間以上も生活したからであろうか、彼女の話す日本語はきわめて正確である。

37) 彼女の結婚を遅らせた原因のひとつは、その「高貴な血筋」ではなかったかと推定される [SAKAI 1972: 15]。

知らせてきた。また酒井をわが子のようにいとしがり、早く幸せな結婚生活を送るようにと勧めてきた。

1967年10月から、酒井は、笛(尺八)の音と、「黒装束の深編笠を被った素浪人」が「スエコさま」とよびかける声に夜な夜なうなされ続けた。その霊は、織田信長の告げたエトの男と名のるだけで本名を明かさず、結婚かさもなくば自害をと迫るのであった。たまりかねて ouija board に伺うと、次のように出てきた [SAKAI 1972: 29]。

コイシイ ヒト ヨ キョウ モ マタ ソナタ ノ オモカゲ ユメ デ ミタ コイシ
イ ヒト ヨ イマ イズコ フェ ノ ネ キカセシ ボク ワ ヨブ

それから毎晩のようにその霊は現われ、酒井は不眠のためノイローゼぎみとなり、体力も次第に消耗していった。そして翌1968年2月、白光が突然ひらめき、ouija board の使用禁止命令が出た。この頃から幻聴状態がずっと続き、完全な不眠症に陥ってしまった。すると例の男の霊がなおもしつこく結婚を迫り、承諾すれば眠らしてやると約束したので、とうとう受諾の叫びを発した。すると「ついに私のものになった」という声が聞えたかと思うと、急に口びるに冷たい圧迫感を覚え、腕や体全体にも冷たい圧力を感じたのである。

こうして更に不眠症が続き、酒井は勤務を休み始めた。そのため上司が心配してヒロの親戚のもとに半強制的に送りこんだ。この頃は死の妄想にとりつかれていて危険な状態だった。ヒロで彼女はハワイ島の女性霊能者十時法照のもとに連れて行かれたが、体内の霊が強すぎて治せないと言われ匙を投げられた。その晩、彼女は高熱を発生し、病院に急ぎょ入院し、1日中死んだように眠り続けた結果、ようやく体力を回復して一命をとりとめた。

後日、母の遺骨を携えて日本を訪問した際、合気道の教師から紹介された女性霊能者を通して、深編笠の男の霊がその女性霊能者の亡夫であったことを知らされた。

2) 宗教的活動

酒井幸照は東本願寺の門徒として得度した。母が東本願寺の系統をひき、父は西本願寺であった。しかし宗教は結局はすべて同一との信念に基づき、排他的な立場をとらないでいる。修行は1975年から1976年にかけて高野山で1年間、続いて十時法照の勧めで真言宗醍醐寺伝法学院で1年間行った。

酒井幸照の霊能力は、とりわけ「霊をひく」能力に顕著である。それを霊供養と称

している。靈感の強い人は、人間の亡霊——善霊であれ悪霊であれ——にとどまらず、蛇・猫・狐・犬などの動物霊をもひくとされる。酒井はそうした霊を自分に憑けさせ、供養する。具体的には、他人の足の痛みが酒井の足にくるというような身代りの場合が多い。もちろん修了後は自分で自分を祓うのである。ふつうの霊の場合2～3日でおち、悪霊の場合は2～3週間かかるという。霊供養は基本的には霊の成仏を目ざすものゆえ、憑いた霊の幸福のため読経して祈願する。それによって憑いた霊の力は徐々に弱まっていく。

霊供養のほかには靈感による告知も行うが、特記すべきは法水加持である。1080回の真言を唱えて加持した法水は信者に分与される。癌で苦しむ人がその法水を飲むと苦しみが和らぎ、火傷あとに綿にしみこませた法水を当てると痛みが和らぐという。水は無料に近いのと、キリスト教に聖水の伝統があるので、法水加持を行うようになったとのことである。醍醐寺の護符類は高価なので使用していない。

酒井家の祭壇には、阿弥陀仏と不動明王の梵字を書いた掛軸が祀ってある。神は霊だから、文字の方が像よりもふさわしいという考え方である。そのほか弘法大師の真言や贈物の観音像も祭壇に置いてある。

参問者は人種・宗派にかかわらず受け入れている。ハワイアン、ポルトガル系白人、中国人などが非日系人では比較的多いが、参問者は圧倒的に日系人で占められる。宗派別では仏教徒とキリスト教徒が半々位である。キリスト教徒には先祖への祈りが無いが、仏教徒の先祖がいる場合にはその供養を行っている。また白人のキリスト教徒にはキリスト教会にも行くように勧めている。

外部宣伝は一切行わないにもかかわらず、参問者はくちコミで集ってくる。酒井幸照は別に仕事をもって生活を支えているので、休日のみ宗教活動を行っている。教会ではないので集会はなく、信者間の横のつながりは非常に弱いと推定される。

Ⅲ．比較と考察

1. 霊能者の誕生過程

先に霊能者の概念を規定し、霊的存在と直接交流しうる能力を備え(ると信じられ)、その能力を他者の現実的問題のために活用する者とした。したがって霊能力たる十全の資格は、神秘体験や修練の結果獲得した霊能力の有無、およびその活用の如何が指標となる。

霊能者が誕生する過程は、大別して、他力による召命型、自力による修行型、それ

に制度的要請による世襲型の3類型が考えられている³⁸⁾。召命型とは、当人の意志とは無関係に靈的交流(神がかりなど)を体験し、靈能者としての道程を歩み始める場合である。この型に属する靈能者には、石鎚の神がくだった三宅シナ、観音の声を聞いた松本妙清、49日間神ダリーになった島福カメ、不動明王からの召命を受けた松岡順澄、先祖や虚無僧とおぼしき靈との交流に悩まされた酒井幸照があげられよう。これに対し、意図的な修行の結果として靈能力を感得した者が修行型に属する。東大寺の加行や母伝授の行法によって靈能力を磨いた平井辰昇、天真道本部での修行を通して靈感を得た沢田花祥が、この例に当てはまる。世襲型に属する者としては、松本妙清の嫡子で多少の靈能力を行使する松本知晃がいる。世襲型を広く解釈すれば、母の宗教活動の影響を多分に受けた平井辰昇や島福カメの場合も考えられる。このほか召命型と修行型の間位置する場合が存在する。慈久ローズや林生道のように、子供の頃から靈感が鋭く、ある程度の人生経験を積んだ後、私的にカウンセリングや救済活動を行うようになった者がこの型に属する。なお人生経験についていえば、両者とも白人と結婚している点に関心をひく。またローズや林に限らず、一般的に靈能者としての活動開始時期が、ある程度の人生経験を積んだ中年以降であることも、注目されてよい。

召命型、修行型というような一般的類型化は、ひるがえって特殊性を論ずる際に大きな意味をもって来る。ハワイでは、召命型に限らず多くの靈能者が後に日本の本山等で修行を行っており、この点がとくに顕著にみられる。たとえば三宅シナは石鎚山、松本妙清は天台宗相良寺、松岡順澄は金峯山、酒井幸照は高野山と醍醐寺、慈久ローズは比叡山でそれぞれ修行を行っている。島福カメの場合は、沖縄の伝統的宗教に修行センターを欠くこともあって本山での修行はしていないが、沖縄に帰郷した際、久高島の御嶽などを訪問し、幾つかの啓示や不思議を体験している。このように日本での修行はハワイの靈能者にとって不可欠の要素とすらなっている。それはどのような意味をもっているのだろうか。

まず、靈的交流対象がもともと日本で崇拝されてきた神仏である関係上、宗教活動に必要な知識や儀礼の習得のためには、日本の本山が最良の場として考えられたはずである。なかんずく宗教的最高権威である本山の允許状等の所持は、ハワイでの宗教活動にきわめてプラスに作用するからである。本稿冒頭にも指摘したように、ハワイの靈能者たちは、キリスト教のみならず浄土系教団などからも邪信・迷信の元凶と目

38) シャーマンのイニシエーションの諸類型をめぐって、召命型、世襲型、職業型、修行型、偶発型などが話題になっている。[桜井他 1975: 25-26]。

されてきた。それはまた日本人の後進性を表わすものとして、非難を浴びてきたのである。したがってそうした非難に耐えるためには、現証はもとより、霊能力の源泉が民間信仰や迷信ではなく、深遠な仏教哲理にもとづくものであり、かつ社会的に公認されてきたことを主張する必要がある。本山の「お墨付」が最も明瞭にその正当性を賦与してくれるわけである。他方、本山の側でも、その国際的イメージの向上等の理由でハワイ支部を優遇してきた面も否定できない。

次に本山の宗派について検討する必要がある。平井の華嚴宗、松本とローズの天台宗、林と酒井の真言宗は、日本ではいずれも浄土系、禅宗系、日蓮系諸教団よりも歴史的には古い存在である。したがって、歴史的先後関係の点では、後者の諸教団に対し優越性を主張することが可能である。たとえば東大寺の平井は、古代仏教である華嚴宗と皇族寺院である東大寺に対し、限りない誇りを抱いている。平井はかつてハワイの東大寺と新興宗教を同列に扱う見解に強く反発し、東大寺側から見ると本願寺こそ新興宗教であると断じた。そして日本の仏教はすべて奈良の東大寺がはじめたといっても過言でないとする平井の見解をめぐって、浄土宗の開教使と新聞紙上で激論をたたかわしたことがある³⁹⁾。また鎌倉新仏教はもともと天台宗から派生したという見解も、それなりの説得性をもっている。また信貴山も、東大寺の聖武天皇はおろか、聖徳太子にまで遡る寺史を有しているが、それに対する誇りもこれまた強烈である。このようにハワイでの新しい宗教活動が、‘新興宗教’どころか、日本の古代仏教の延長であることを主張する際に、日本の本山は俄然脚光を浴びてくるのである。ハワイにおける新しい宗教活動が、その内容の如何をとわず、時として本山の威光を背景に展開され、霊能者および信者の本山に対する帰属意識がかくも強烈であるのは、およそ以上のような理由によるのである。

2. 交流対象

霊能者が交流する神的対象は、不動明王（平井、松岡、酒井）、観音（松本）、地藏（ローズ、松岡）、毘沙門天（林）、蔵王権現（松岡）などの仏教的なものから、四国の石鎚神社（三宅）、沖縄の普天間宮（島福）、広島島の厳島神社、山口の大友神社（沢

39) 本派本願寺理事長が議制会において「メシヤ教、生長の家、踊る宗教、或は東大寺の新しい宗教へ盛んに集まる人々の心理をよく研究して対処せねばならぬのではあるまいか」【布哇報知 1958・8・15】と述べたことに対し、平井が反論し【布哇タイムス、布哇報知 1958・8・16】、それをめぐって本願寺議制会書記の見解【布哇タイムス 1958・8・18】、浄土宗開教使による批判【布哇報知 1958・8・23】、浄土宗開教使に対する東大寺側信徒の反論【布哇報知 1958・8・25】、浄土宗開教使による再批判【布哇報知 1958・8・29】などの応酬があった。

表7 女性 霊 能 者

	三宅 シナ	松本 妙清	平井 辰昇	沢田 花祥	松岡 順澄	慈久 ローズ	林 生道	島福 カメ	酒井 幸照
世代	一世	一世	二世	二世	一世	一世	一世	一世	二世
出身地	広島県	熊本県	熊本県	ハワイ	山口県	東京	東京	沖縄県	ハワイ
年齢 (1979)	没	没	70?	73	72	50?	50?	78	40?
居住地	ホノルル	ホノルル	ホノルル	ホノルル	ホノルル	ホノルル	マカヒコ	ホノルル	エワ
創始年	1913	1932	1941	1951	1955?	1973	1976	1945	1977
施設	神社	民家改造	寺院	民家改造	民家改造	自宅 寺院建立中	民家改造	自宅	自宅
結婚相手	?	同県人	二世 (離婚)	二世 (3回結婚)	二世	白人	白人	同県人?	独身
子、供	?	○	×	○	○	×	養子	○	×
言語	日本語	日本語	日・(英)	日・(英)	日本語	日・英堪能	日・(英)	日本語	英・日
信徒		観音講 120人 婦人会 220人	3万人 中核 300人?	会員100人	300人	300人	250人		
修行場	石鎚山	天台宗 相良寺	龍光徳寺 東大寺	天真道本 部	金峯山	比叡山	禅宗尼寺 信貴山		高野山 醍醐寺

表8 霊能者の祭祀・交流対象

	本尊・主神	そ の 他
三宅 シナ	石 鎚 神	のちに加藤神社の分霊が合祀されている
松本 妙清	観 音 菩 薩	のちに地藏が奉納されている
平井 辰昇	不 動 明 王	地藏菩薩, 阿弥陀如来, 薬師如来, 千手観音, 天神, 水神, 弘法大師等
沢田 花祥	天 真 大 神	三蔵稻荷, 厳島神社・宇佐八幡宮・大友神社・普天間宮・淡島神社の神, ハワイの氏神等
松岡 順澄	不 動 明 王	脳天大神, 蔵王権現の御巳様, 水子地藏
慈久ローズ	延命(とげぬき) 地藏菩薩	
林 生道	毘 沙 門 天	融通尊, 観音菩薩
島福 カメ	父と母の二神	イエス, 普天間宮, 観音菩薩
酒井 幸照	不 動 明 王	阿弥陀如来, 弘法大師, 観音菩薩

田)などの神道的なものまで、きわめて多様性に富んでいる(表8)。しかし、共通の特性に注目する必要もある。不動明王は、修験道で息災、増益、敬愛、降伏などさまざまな願事を祈願する対象として最も中心的な神格であった【宮家 1970: 291】。観音や地藏は、一般的なそれではなく、浅草観音、およびとげぬき地藏という江戸の庶民信仰のなかで最もポピュラーな存在であった。また毘沙門天も七福神の一つとし

て、特に商売繁昌に御利益があるとされている。つまり仏教的・修験道的な交流対象は、庶民の現世利益的信仰を集めてきた神格であるといえよう。これに対し、神道の神々は、石鎚のように修験道的の性格を有するものも含めて、移民の地域性と深く結びついている点の特徴である。

交流対象の数に視点を移すと、それをほぼ一つに限定する「唯一型」(三宅, 松本, ローズ)と、多数に拡大する「多数型」(平井, 沢田)とに区別できよう。傾向として言えることは、1950年代までに登場した霊能者には「多数型」が多く、70年代以降は「唯一型」ないし「少数型」がやや目立つ点である。しかしいずれの型の霊能者にしろ、他の霊的存在の存在を否定しないところに一般的特徴があると言ふべきであろうか。

3. 霊能力の活用

霊能者は、霊能力を参問者や信者のために活用して、はじめて全うなる霊能者といえる。その際に行使される方法、およびそれにかかわる物質・物体について比較・検討してみよう。

1) 方法

方法に関して圧倒的に多いのは、「お知らせ」「お告げ」などの取次である。これらは不意に感得することもあるが、祈禱や読経の結果として、霊能者に下ることが多い。「お知らせ」は言葉を媒介として神仏から伝達されることが多いけれども、イメージを「お知らせ」と受けとる場合もある。「お知らせ」によって明らかにされるのは、神仏の意志、苦悩の原因、タブーの侵犯などである。霊能者に対する期待は、プロテスタントの牧師や浄土真宗の開教使と比較すると、一層明瞭に理解できる。プロテスタントでは神の意志は聖書のみを求められるので、牧師はそれを解釈して信者に説くにすぎない。祈禱に対する直接的な答を牧師に期待することはで

表9 方法

	三宅 シナ	松本 妙清	平井 辰昇	沢田 花祥	松岡 順澄	慈久 ローズ	林 生道	島福 カメ	酒井 幸照
お知らせ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
祈禱	○	○	○	○	○	○	○	○	○
按手加持	○	○	○		○		○		
法水加持	○				○				○
九字			○		○				
霊媒			○	○					
憑きもの落とし			○		○		○		
透視			○				○		
身代り							○		○
ト占		○	○			○			
息吹		○	○						
灸		○							
先祖供養		○	○	○			○	○	○
結婚式・葬式		○					○		

きない。浄土真宗においては祈禱すらも否定されている。

次に多い方法は、密教系・修験系の加持である。ハワイでは真言宗が加持祈禱の専門であるが、霊能者もこれを多用している。特に接手加持とも称すべき方法が普及している。それは「手かず」ともいわれ、参問者・信者の体に直接手を当てて施すもので、世界救世教などが使用する「手かざし」とは異なっている。接手加持では、神仏の力により手が自然に動くことが強調される。しかし、精神集中など一定の技術を伴うことも否定できない。霊能者の主観的立場からすると、天賦の靈動のみを強調する場合（松本、松岡）と、それに加えて行を重視する場合（平井）とがある。

取次、加持、祈禱以外の方法としては、神が一人称で語る霊媒（平井、沢田）、霊を代ってひきつける身代り（林、酒井）、見えるはずのないものを見透す透視（平井、林）、霊を追放する憑きもの落とし（平井、松岡、林）、真言、九字、呪文、占いなどがある。これらの方法には日本の民間信仰的要素が濃厚に認められる。

2) 物体・物質

霊能者が使用し、また信者によって使用される物体で、それ自体に霊力が宿っているとされるモノは、表10に示した通りである。最も広く使用されているモノは、御札・御守などの呪符の類である。その他には、水や酒などの液体、石や砂などの固体、米や豆などの食物、数珠や経典などの祭具等が使われている。

表10 物体・物質

	三宅	松本	平井	沢田	松岡	慈久	林	島福	酒井
	シナ	妙清	辰昇	花祥	順澄	ローズ	生道	カメ	幸照
呪符	○	○	○	○	○		○		○
法水		○			○	○			
紙			○		○		○		
塩			○						
米			○						○
甘茶			○						
豆			○						
酒			○						
砂		○							
石灰				○					
灰					○				
納経帖			○						
大般若経							○		
数珠			○			○			

それらの物体に霊力が宿るとみなされる認知過程には、加持(法水)、儀礼(供物)、分身(護符)、聖性(経典)などの論理がはたらいっている。そしてそれらを、家庭の神棚や仏壇に祀ったり、壁などに貼ったり(御札、絵姿)、護身のために身につけたり(御守)、体内にとりこんだり(法水、甘茶)、身体に接触させたり(数珠、砂)、身体に接触してもらったりして(大般若経経本、納経帖)、靈験に与ろうとする。

霊能者によって、これらの物体・物質を多用する者(平井、松岡、林)と、一切使用しない者(島福)とが存在する。

なお、霊能者の霊能力も、物体に宿る神秘力も、信者の信仰や熱意なしには十分に有効性を発揮しえないとされる。御百度や日参などは、信者の熱意や努力に帰せられる方法の典型であろう。

4. 組 織

霊能者に期待する事柄は、病気、商売、争い、占い等、個人的性格が濃厚である。したがって霊能者と参問者との個人的な人間関係が基本となっている。それゆえ、島福や酒井のように、マンツーマンの個人的関係を重視し、信徒組織を形成しない霊能者の場合も存在する。しかしながら、多くの場合、信徒集団が霊能者を中心に形成されていく。大多数の霊能者は、特別な場合を除いて、外部宣伝を敬遠し、信者の口から口へと伝わるいわゆる「くちコミ」方式に頼ってきた。霊能者は、全般的に、信者の出入りにかなりの注意をはらっている。たとえば信者の紹介がなければ受け入れないとか、民族による区別をもうけるとかしている。後者の例では、東大寺が非日系人をもはや布教対象としていないし、本稿ではとりあげなかったある女性霊能者の場合でも、東洋人（日本人、中国人、朝鮮人を考えている）以外をシャットアウトしている。逆にいえば、その結果として、霊能者をめぐる信徒集団がかなりの親密性を保持できるのである。

東大寺の奉信会やパロロ観音寺のピクニックなどが、信者同志の親密度を増すのに大切な機会を提供してきたことは言うまでもないが、何といっても寺院建立の共同作業が連帯意識の高揚に果してきた役割が最大であった。そしてその時の同信者が長く信徒集団の中核を形成してきたようである。また信徒の大半が共通項でくられる点も、小集団の絆を考える上で重要である。たとえば石鎚神社は一世が中心だった。パロロ観音寺には熊本県人が多く、県人会的、クラブ的性格をおびている。天真道は女性ばかりである。東大寺やカパラマ不動教会は二世が中心であり、ローズや林のグループは二世から三世、あるいは非日系人へと信徒の比重が移っている点に特徴がみられる。なお実質の活動会員数は、最大の場合でも約200~300名を限度としている点が指摘できよう。

ところで信徒の増大に関して、新宗教運動の研究では、教祖と組織者との関係がよく問題にされる。有能な組織者の存在が運動の飛躍的發展に大きく貢献した点が評価されるからである。本稿でとりあげたハワイの霊能者の場合には、有能な補佐役ないし組織者として敏腕をふるった人については、寡聞にしてあまり知らない⁴⁰⁾。霊能者

40) しいてあげれば、カパラマ不動教会のIぐらいであろうか。

の夫の場合でも、松本妙清の夫のように得度した者もいたが、一般的に組織者としての影はうすかったように思われる。ハワイにおける霊能者中心の集団は、組織の飛躍的發展を志向しない点がむしろ特徴といえよう。

最後に後継者問題についてふれておく。霊能者の後継者は、神秘的な霊能力を売り物とするだけに難しい点が多々存在する。初代の霊能者をすでに欠くところは、石鎚神社とパロロ観音寺である。前者は弟子の高齢化のため先行き予断を許さない。後者は霊能力よりも儀礼活動に力点を移行し、ある程度の成功をおさめている。東大寺では甥を跡継ぎに養成し始めたが、途中で挫折し、今では姪が補佐役をつとめている。沢田や松岡には有力な後継者がいる。ローズや林は年齢的にまだ若い。

5. その他

霊能者は元来が己れの霊能力に依存するゆえ、体系的な教義を独自に展開することは少ないが、それでも注目すべき教えが強調されることはある。たとえば平井辰昇の日本至上主義は、多少アナクロニスティックなところが終戦直後の日系人にはかえって受容された面がある。島福カメの沖縄的世界観もたいへん興味深い。啓示を記した「お筆先」の類は、島福カメ、松岡順澄にみられる。

ハワイの日系霊能者にはなぜ女性が多いかという問題も、考慮に価する。アメリカのキリスト教的伝統のなかでは、クリスチャン・サイエンスを創始した Mary Eddy 夫人などごく少数の例外を除き、女性の宗教家は稀有である。例外的場合でも、社会活動や児童伝道等に従事し、集団の指導的立場につくことは無きに等しい。これに対し日系の女性霊能者は、巫女、ユタ、イタコなどの日本的宗教伝統の継承者として、主として日系人の間で重要な役割を果たしている。女性は靈感が発達しているという精神的特性より、このような文化的・社会的背景こそさらに追求されねばならない。

おわりに

本稿はハワイ日系人社会における女性霊能者の活動と役割に注目しつつ、日本人ないし日系人にとって民間信仰のもつ意味の一端を解明することを意図した。本論で明らかにされたごとく、女性霊能者の活動は、民間療法や病人加持にかかわる領域から、告知、予言、卜占、霊媒による取次活動、さらには個人的・家族的・小集団の結合の問題にまでまたがる領域をカバーしている。しかし若干の例外を除き、冠婚葬祭や宗教教育の領域には今までほとんど関与してこなかった。一言でまとめるならば、女性

霊能者は主として現世利益的・民間信仰的な領域にかかわり、宗教の複数帰属の慣習に支えられて存続してきたといえる。

しかしながら、女性霊能者の活動は現世利益的・民間信仰的であるがゆえに、たんに伝統的なものの残存や継承ではなく、その時代、その地域の切実なニーズを宗教的に反映してきたといっても過言ではない。こうした視点から、女性霊能者の過去の足跡を辿り、今後の動向を探る作業は、更に前進せられなくてはならない。そこで最後に、以上提出した資料によって触発された今後の課題を、箇条的に書き記しておく。

- 1) 移民の一世・二世の時代が去るにつれ、氏神的民間信仰が衰微する徴候がみられる。いわば氏神信仰の拡散ともいうべき現象が進行している。これと関連し、日本人・日系人の孤立的非適応を主張する東大寺の動向が注目される。東大寺は終戦直後から1950年代までの間に、主として日系二世にアピールしたが、現在では加持祈禱もさりながら先祖供養に重点が移行しつつあるように思われる。
- 2) 東大寺のようないわば‘純粋日系人’を対象とするいき方とは異なり、いわば‘混血日系人’ないし異人種間結婚家庭の間に広がっていく現世利益的民間信仰の問題。たとえば白人と結婚した日本人女性が霊能者となった2例の示唆する問題。民間信仰のレベルでは、すでに日系人と非日系人の区別が相当にあいまいになってきている。しかしその場合でも、信貴山と高岩寺の例が示すように、霊能活動に先祖供養を介在させるかさせないかによって、メンバー構成に相当の開きができてきている。
- 3) 霊能者と医師、精神科医の職能にかかわる分野での競合・協力関係。とくにパートタイムでカウンセリングをしてきた女性の霊能者への転身が暗示する問題の追求。ハワイほど日系人が稠密な社会に、日系人の精神科医が僅少である事実と、霊能者の存在との関連性。もちろん女性霊能者ばかりでなく、いわゆる新宗教運動の信徒活動を考慮する必要もある。
- 4) 沖縄県出身者の二重の適応の課題と宗教との問題。沖縄県人中心のキリスト教教会、本派本願寺・東本願寺に所属する寺院、および島福のような霊能者の存在との相互的な構造的関係。
- 5) 新しい崇拜対象の出現。たとえばカパママ不動教会の水子地藏。1970年代に至りアメリカでも妊娠中絶が公認されるようになった。

ハワイのように民間信仰を極度に排斥するキリスト教社会、しかも日本国内でも民間信仰には冷淡な浄土真宗が君臨する日系人社会にあって、なおも根強く存続し発生する日本的民間信仰の強靱性は、この他にもさまざまな問題を宗教的に反映している

に相違ない。

謝 辞

ハワイの調査にあたっては、現地の宗教家、研究者をはじめ多くの方々の御援助をたまわった。とりわけ本稿に関しては、木村富次師、松本知晃師、平井辰昇尼、沢田花祥師、松岡順澄尼、慈久ローズ尼、林生道尼、島福カメさん、酒井幸照尼の御理解ある協力の賜物と厚く感謝申し上げる。論文の性格上、本文中の敬称を省略したが、御寛恕いただきたい。また一人一人の御名前はあげないが、信徒の方々の御好意に対しても深謝したい。またハワイ大学宗教学科の R. Bobilin 教授、A. Bloom 教授、M. Saso 教授、G. Tanabe 講師をはじめとするスタッフの方々の御便宜・御助言は、調査遂行上かけがいのないものであった。

ハワイ調査団のメンバーにも同様の感謝を捧げたい。研究代表者の柳川啓一教授はもとより、森岡清美教授をはじめ井上順孝、小林正佳、西山茂、星野英紀らの諸氏に、共同調査・討論を通して啓発されるところが多かった。

最後に、本稿の一部を民博共同研究班「東アジアの祭祀と芸能」（研究代表者：高取正男教授）の研究会において報告し、メンバー諸氏から貴重なコメントをいただいた。記して謝す次第である。

文 献

- ARMSTRONG, R. W. (ed.)
 1973 *Atlas of Hawaii*. The University of Hawaii Press.
 「大世界」記者
 1957 「生きているオンナ御開山上人」『大世界』1: 84-90, 実業の世界社。
 布哇日本人移民史刊行委員会
 1964 「ハワイ日本人移民史」ハワイ日本人連合協会。
 布哇真言宗別院
 1927 『創立満十周年に際して』。
 平井辰昇
 1957 『母の信仰に導かれて——東大寺ハワイ別格本山縁起』。
 本派本願寺布哇開教教務所
 1918 『布哇開教誌要』。
 堀 一郎
 1951 「民間信仰」岩波書店。
 HUNTER, Louise Harris
 1971 *Buddhism in Hawaii: Its Impact on a Yankee Community*. University of Hawaii Press.
 井上順孝
 1979 「教団の沿革と現状 (22) その他」柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告』東京大学宗教学研究室, pp. 67-70。
 勝又俊教
 1972 「加持」『平凡社大百科辞典』5 平凡社。
 小林正佳
 1979 「教団の沿革と現状 (16) 天理教」柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告』東京大学宗教学研究室, pp. 53-57。
 高岩寺
 1974? 『天台宗高岩寺 (Tendai Shu Koganji Togenuki Jizo-son)』。

中牧 ハワイにおける日系霊能者と民間信仰

LEBRA, Takie Sugiyama

1970 Religious Conversion as a Breakthrough for Transculturation: A Japanese Sect in Hawaii. *Journal for the Scientific Study of Religion* 9: 181-196.

LUM, Henry and M. MIYAZAWA

1941 An Abortive Religious Cult. *Social Process in Hawaii* 7: 20-24.

宮家 準

1970 「修験道と現世利益」 日本仏教研究会編『日本宗教の現世利益』大蔵出版, pp. 283-305.

中牧弘允

1975 「北海道開拓民の宗教意識——常呂町における寺院の成立と展開をとおして」 増谷文雄編『現代青少年の宗教意識』すずき出版, pp. 347-363.

1977 「ハワイの日系宗教における日本指向とアメリカ指向」『宗教研究』51(4): 20-22.

1979a 「移民と宗教——ハワイ日系宗教と真宗教会」『歴史公論』5(1): 117-124.

1979b 「宗教制度の変動と論理——北海道常呂町の調査から」 柳川啓一・安齋伸編『宗教と社会変動』東京大学出版会, pp. 235-261.

1979c 「ハワイ日系宗教史概説」 柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告』東京大学宗教学研究室, pp. 5-13.

1979d 「教団の沿革と現状(6) 天台宗」 柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告』東京大学宗教学研究室, pp. 30-33.

1979e 「教団の沿革と現状(8) 華嚴宗東大寺布哇別格本山」 柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告』東京大学宗教学研究室, pp. 36-38.

1980 「地蔵の語るハワイ日系移民の歴史」『季刊民族学』12: 98-105.

中野 毅

1979 「教団の沿革と現状(10) 日蓮正宗アカデミー」 柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告』東京大学宗教学研究室, pp. 41-43.

SAKAI, Sueko

1972 *Mysteries of Life*. Vantage Press.

桜井徳太郎, 佐々木雄司, 佐々木宏幹

1975 「座談会」『シャーマニズムの基本問題』『季刊現代宗教』1(2): 10-33, エヌエス出版。

島福カメ

1968 『天寶』。

1969 増補『天寶』。

1972 増補『天寶』。

白水寛子

1979 「変化エージェントとしての新宗教の霊能力者——S教団の事例」 森岡清美編『変動期の人間と宗教』未来社, pp. 71-95.

柳川啓一

1977 「宝島」『展望』228: 8-9, 筑摩書房。

柳川啓一・森岡清美編

1979 「ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告」 東京大学宗教学研究室。

柳川啓一・中牧弘允

1973 「宗教変動の解釈をめぐって——北海道常呂町の宗教と社会」『思想』591: 92-103, 岩波書店。

YOSHINAGA, Toshimi

1937 Japanese Buddhist Temples in Honolulu. *Social Process in Hawaii* 3: 36-42.